茨城県那珂郡大宮町

上宿上坪遺跡

発掘調査報告書

平成16年3月

株式会社　ダイナム
大宮町教育委員会

茨城県那珂郡大宮町

上宿上坪遺跡

発掘調査報告書

平成16年3月

株式会社　ダイナム
大宮町教育委員会

ごあいさつ

大宮町は茨城県の北部に位置し、町域は久慈川と那珂川に挟まれ、全体的に北部が高く、南部が低い傾斜をした丘陵地を形成しています。この二大河川の沿岸には、肥沃な土地が開け、豊かな自然に恵まれ古くから人々の生活の場となり、多くの歴史を重ねてきております。

そのため町内には、古墳、塚、集落跡など数多くの遺跡が存在しており、これらの遺跡は当時の様子を知る手がかりとなることはもちろんのこと、現代の私たちが豊かに生活をすることができる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化遺産を後世に伝えることは、私たちの大切な任務であり、郷土の発展のためにも貴重なことと考えております。

このたびの調査は、遊技場建設工事に伴い、周知の遺跡である上宿上坪遺跡の発掘調査による記録保存を目的に行ったものであります。

遺跡内からは縄文時代、奈良平安時代、中世の遺構・建物が検出されました。この調査報告によって、この地域の祖先の遺業をしのぶことができるとともに、文化財に対する認識がいっそう深まり、遺跡愛護の精神や郷土の文化を培う上で貴重な資料として役立てていただければ幸いであります。

最後になりますが、この発掘調査にあたり、格別のご指導を賜りました茨城県教育庁文化課並びに瓦吹堅先生、そして調査にご協力いただきました地元の関係者、また、一切の経費をご負担いただきました事業所株式会社ダイナム様、適正かつ慎重な調査をいただいた発掘業者有限会社日考研茨城様、各位に心から厚く感謝を申し上げます。

平成16年３月

茨城県那珂郡大宮町教育委員会

例　　言

1．本書は、店舗建設に伴い、有限会社日考研茨城により行われた発掘調査報告書である。

2．本書は、下記の遺跡を収録したものである。

本調査　上宿上坪遺跡（かみじゅくかみつぼ）　大宮町宇留野字上坪193に所在する。

3．㈲日考研茨城が株式会社ダイナムからの委託を受けて、茨城県教育委員会および大宮町教育委員会の指導のもとに発掘調査を下記の期間に実施した。

平成15年7月22日～15年8月22日

4．発掘調査組織は下記の通りである。

調査担当者　大渕淳志　日本考古学協会員　（有）日考研茨城

調査員　　遠藤啓子　（有）日考研茨城

調査員　　大渕由紀子　（有）日考研茨城

事務局　　大宮町教育委員会生涯学習課

整理作業は、大宮町教育委員会の指導のもとに、小川和博・大渕淳志・遠藤啓子・大渕由紀子・大野美佳（以上㈲日考研茨城）が行なった。

5．本書の編集執筆は、小川和博・大渕淳志が行った。

6．本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

7．本書中の色調に関する表現は新版標準土色帖（農林水産技術会議事務局監修2000年版）に従った。

8．遺構および遺物の写真撮影は大渕淳志・小川和博が行った。

10．記録および出土遺物は、大宮町教育委員会が保管している。

11．発掘調査および報告書の作成に当たり、以下の方々のご教示・ご高配を賜った。記して、深く謝意を表す次第です。（敬称略・順不同）

茨城県教育委員会、（財）茨城県教育財団、土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場、阿久津久、瓦吹堅、比毛君男、稲田義弘、大塚雅昭、川村満博、越田真太郎、藤崎芳樹、越川敏夫、黒沢哲郎、戸村勝司朗、荒井世志紀、鬼沢昭夫

12．各調査には以下の者が参加した。

佐藤忠、佐藤みさを、井澤良忠、井澤しいつ、佐藤富夫、佐藤豊、佐藤實、栗山光男、川﨑東功、渡辺昇次郎

13．遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。

竪穴住居跡：ＳＩ　溝状遺構ＳＤ　土坑：ＳＫ　竪穴状遺構：ＳＸ　柱穴：Ｐ

撹乱：Ｋ

本文目次

序文
例言
第Ⅰ章　序章 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査経過とその概要 …… 1
　第３節　調査日誌 …… 1
　第４節　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 3
　　１　遺跡の位置 …… 3
　　２　周辺の遺跡 …… 5

第Ⅱ章　検出された遺構と遺物 …… 7
　第１節　概要 …… 7
　第２節　縄文時代 …… 7
　　１　竪穴住居跡 …… 7
　　２　遺構外の出土遺物 …… 9
　第３節　弥生時代 …… 9
　第４節　古代 …… 10
　　１　竪穴住居跡 …… 10
　　２　溝状遺構 …… 18
　　３　土坑 …… 20
　第５節　中世 …… 26
　　１　概要 …… 26
　　２　溝状遺構 …… 26
　　３　土坑 …… 31

第Ⅲ章　まとめ …… 39

挿図目次

Fig.1　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
Fig.2　上宿上坪遺跡周辺地形図 …… 4
Fig.3　遺構配置図 …… 6
Fig.4　住居跡SI05実測図 …… 8
Fig.5　住居跡SI05出土遺物 …… 8
Fig.6　遺構外出土遺物 …… 10
Fig.7　住居跡SI01実測図 …… 11
Fig.8　住居跡SI01出土遺物 …… 12
Fig.9　住居跡SI02実測図 …… 14
Fig.10　住居跡SI02出土遺物 …… 16
Fig.11　住居跡SI03実測図 …… 17
Fig.12　住居跡SI03出土遺物 …… 17
Fig.13　住居跡SI04実測図 …… 19
Fig.14　住居跡SI04出土遺物 …… 19
Fig.15　溝状遺構SD01、03実測図 …… 21
Fig.16　土坑SK01、02、03、04、05、07実測図 …… 24
Fig.17　土坑SK08、10実測図 …… 25
Fig.18　溝状遺構SD01、03　土坑SK07出土遺物 …… 25
Fig.19　溝状遺構SD06、08実測図 …… 28
Fig.20　溝状遺構SD09実測図 …… 30
Fig.21　土坑SK11、12、13実測図 …… 32
Fig.22　土坑SK14、15、16実測図 …… 34
Fig.23　竪穴状遺構SX01、02実測図 …… 36
Fig.24　中世　竪穴状遺構SX02　溝状遺構SD06、08出土遺物 …… 37
Fig.25　中世　溝状遺構SD08(2)、SD09　土坑SK13出土遺物 …… 38

写真図版目次

PL.1　遠景　A区全景　A区全景
PL.2　B区全景　竪穴住居跡SI05　竪穴住居跡SI05
PL.3　竪穴住居跡SI01　竪穴住居跡SI01カマド　竪穴住居跡SI01掘形
PL.4　竪穴住居跡SI02　竪穴住居跡SI02カマド　竪穴住居跡SI02掘形
PL.5　竪穴住居跡SI03　竪穴住居跡SI03カマド　竪穴住居跡SI03掘形
PL.6　竪穴住居跡SI04　竪穴住居跡SI04　竪穴住居跡SI04カマド
PL.7　溝状遺構SD03　溝状遺構SD03　土坑SK05
PL.8　竪穴状遺構SX01　溝状遺構SD08　溝状遺構SD08硯出土状況
PL.9　溝状遺構SD09　溝状遺構SD09　溝状遺構SD09獣骨出土状況
PL.10　竪穴住居跡SI05出土遺物　遺構外出土縄文土器　遺構外出土石器
PL.11　竪穴住居跡SI01出土遺物
PL.12　竪穴住居跡SI02・SI04　溝SD01・SD03　土坑SK07出土遺物
PL.13　竪穴状遺構SX01　溝SD06・08　中世溝SD09　中世土坑SK13

PL.14　溝状遺構SD06・SD08・SD09　古代住居址SI04、中世溝SD08
中世溝出土遺物SD08

別　表

1．出土土器観察表

第Ⅰ章　序章

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、店舗造成に伴う事前調査である。平成15年３月５日に株式会社ダイナムから大宮町教育委員会に埋蔵文化財所在の有無の照会が提出され、それに基づき、町教育委員会は同年５月24・25日の２日間造成予定地内に試掘調査を実施した。調査はトレンチ方式で、試掘の結果竪穴住居跡２軒をはじめ、土坑や溝状遺構が検出され、明らかに古代の集落が所在することが判明した。６月13日に茨城県教育委員会との協議により、本調査を実施することとなり、㈲日考研茨城に調査依頼を行う。承諾後大宮町教育委員会・株式会社ダイナムおよび㈲日考研茨城は三者協議を行い、確認調査の結果に基づき平成15年７月22日から同年８月22日まで本調査を実施した。

（大宮町教育委員会）

第２節　調査経過とその概要

本遺跡における発掘調査は、平成15年に実施された試掘調査の結果に基づき、その調査範囲が確定され、同年７月22日より開始した。ここは開発計画によって３ブロックに分かれ、最も広い範囲である店舗建設予定地をＡ区、ここから南側の調整池予定地をＢ区、さらに東側の浄化槽建設予定地をＣ区と呼称し、まずＡ区から重機による表土層除去から始めた。表土層除去後人力による遺構精査を実施、Ａ区において竪穴住居跡５軒、竪穴状遺構２基、土坑９基、溝状遺構８条を検出した。また南側のＢ区では溝状遺構１条、土坑14基を検出する。なお、東側のＣ区では当初確認調査を行い、遺構検出の段階で本調査に移行することとなっていたが、結果遺構・遺物はなく試掘トレンチのみで終了する。

調査は同年８月22日確認された全ての遺構を調査し完了するが、縄文時代中期の住居跡１軒、奈良平安時代の住居跡４軒、溝２条、土坑8基、西側に展開している宇留野城跡との関わりがある中世では竪穴状遺構２基、溝状遺構３条、土坑６基を検出。さらに近世以降と推定される溝状遺構４条と土坑９基を調査した。

（大渕　淳志）

第３節　調査日誌

2003年7月23日～8月22日

７・22　本日より本調査を開始する。発掘器材の搬入。調査範囲を確定し、重機による表土層除去を開始する。

７・23　重機による表土層除去作業の継続。本日より作業員を導入し遺構確認精査を開始する。

７・24　重機による表土層除去作業を継続する。

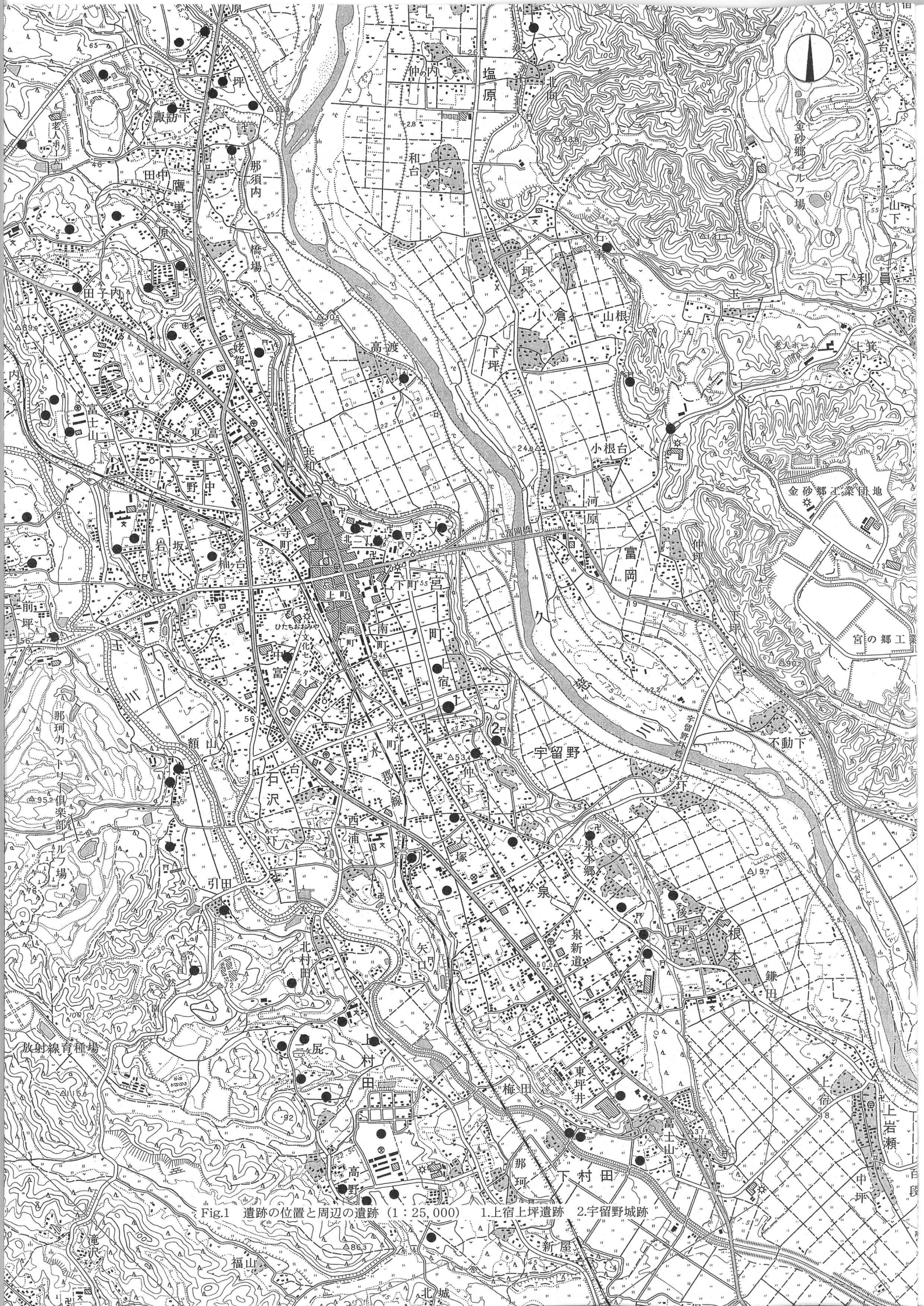


Fig.1　遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25,000）　1.上宿上坪遺跡　2.宇留野城跡

7・25　遺構精査の継続。溝状遺構ＳＤ１・２を検出する。

7・28　遺構精査の継続。溝ＳＤ１・２の発掘。土坑ＳＫ１～４を検出し、調査を開始。本日にて重機による表土層除去を完了する。

7・29　溝ＳＤ２・３および土坑ＳＫ１～６の覆土除去を継続する。住居跡ＳＩ１の調査を開始する。

7・31　住居跡ＳＩ１の調査継続および新たに検出されたＳＩ３の発掘。土坑ＳＫ１～５の平面実測。竪穴状遺構ＳＸ１、溝ＳＤ２、土坑ＳＫ６の断面実測。また溝ＳＤ２～５、土坑ＳＫ１～７の発掘を継続する。

8・1　住居跡ＳＩ１・３の調査継続および新たに検出されたＳＩ２・４の発掘。竪穴状遺構ＳＸ１、溝ＳＤ２・６・７の発掘。

8・4　住居跡ＳＩ２・４の調査継続。土坑ＳＫ８・９の発掘。また溝ＳＤ６・７の発掘を継続する。住居跡ＳＩ２および溝ＳＤ２～５平面実測。

8・5　溝ＳＤ６・８の発掘を継続する。住居跡ＳＩ３・４の平面実測。

8・6　溝ＳＤ６・８の発掘を継続。竪穴状遺構ＳＸ２、溝ＳＤ３・６・７の平面実測。

8・7　溝ＳＤ８、竪穴状遺構ＳＸ２の発掘を継続する。住居跡ＳＩ１～３のカマド発掘。住居跡ＳＩ２～４の掘形調査。

8・8　溝ＳＤ６、竪穴状遺構ＳＸ２の発掘を継続する。住居跡ＳＩ１のカマド発掘継続。住居跡ＳＩ１～３の掘形調査の継続。調査区全体測量。

8・18　南側Ｂ区の調査を開始する。Ｂ区表土層除去をすすめる。Ａ区土坑・竪穴状遺構・溝の写真撮影を行なう。

8・19　Ｂ区の遺構確認のため精査をすすめる。溝ＳＤ９、土坑ＳＫ10～12の発掘を開始する。

8・20　Ｂ区の遺構確認のための精査継続。溝ＳＤ９、土坑ＳＫ10～16の発掘を完了する。

8・21　Ｂ区の検出遺構平面実測を完了する。

8・22　Ｂ区の全景写真撮影を行い全ての調査を完了する。機材搬出作業。

（大渕淳志・小川和博）

第４節　遺跡の位置と周辺遺跡

１．遺跡の位置

上宿上坪遺跡は、茨城県那珂郡大宮町宇留野字上坪に所在する久慈川右岸に位置する台地の東側縁辺部に立地する。周知の遺跡としての上宿上坪遺跡は、縄紋時代中・後期、古墳時代から中世の遺物が散布する集落跡であり、その遺跡範囲の南東側は隣接する宇留野城跡と重複する。

本調査地点は、上宿上坪遺跡の西側に位置するが、周知の遺跡として知られていた上宿上坪遺跡の範囲外にあったが、調査の結果、奈良時代の竪穴住居跡、中世の溝状遺構等が検出されていることからも、少なくとも、上宿上坪遺跡は、本地調地点までは広がっているものと考えられる。また、本調査地点の南側に東西

Fig.2　上宿上坪遺跡周辺地形図（1：3,000）

に走る舌状の谷が存在し、その南側の低地部に向かって、北から南へ緩やかな斜面が形成されている。なお、本調査地点の標高は49～53mを計測する。

2．周辺の遺跡

上宿上坪遺跡の本地調地点同じ台地上で北側に隣接する周知の遺跡として、上ノ宿遺跡が存在する。上ノ宿遺跡は、縄紋時代中期、古墳時代～平安時代にかけての遺物が分布する遺物散布地である。上宿上坪遺跡と舌状の谷を挟んだ南側に位置する遺跡として、仲下遺跡が周知されている。仲下遺跡も、上宿上坪遺跡、上ノ宿遺跡とほぼ同じ時期の縄紋時代中期、古墳時代～中世にかけての遺物を散布する集落跡と推定されている。また、上宿上坪遺跡、仲下遺跡は隣接する宇留野城跡の範囲内と一部遺跡の範囲内が重複している。上宿上坪遺跡の本調査地区から検出された中世の遺構は、宇留野城跡との関連が考えられる。

宇留野城跡は久慈川を望む台地東辺に位置し、侵蝕谷を利用して構築されている。この城は中央の侵蝕谷を挟んで、字御城、字中城、字外城という三つの小字の残る東側の三つの郭（おそらく、主郭を含む）と、西側の四つの郭の計七つの郭より構成された、侵蝕谷の両側で構築された二列の連郭式城郭と考えられている。なお、上宿上坪遺跡の本調査地点と隣接する南側の谷津は、この宇留野上跡の郭を2つに分ける侵蝕谷が続く谷であった。宇留野城跡の東側の郭列は、ほとんど完全な形の土塁や堀が現存している。谷津の西側の郭群は、耕地化・住宅化したため、土塁や堀などの城郭の遺構はほとんど残っていない。なお、この宇留野城主である宇留野氏については不明な点が多いようである。『水府志料』所収の文書等によれば、宇留野大輔宏瑜という高位の僧侶が地頭職を永仁五年（1297）にこの地に任ぜられたとなっている。また、『佐竹秘録』などの文献によれば、天正19年（1591）に佐竹氏二〇代目義宣が水戸城の御移え節に宇留野源太郎氏御列座と書かれている。

（大渕　淳志）

参考文献『大宮町史』（大宮町、昭和52年）

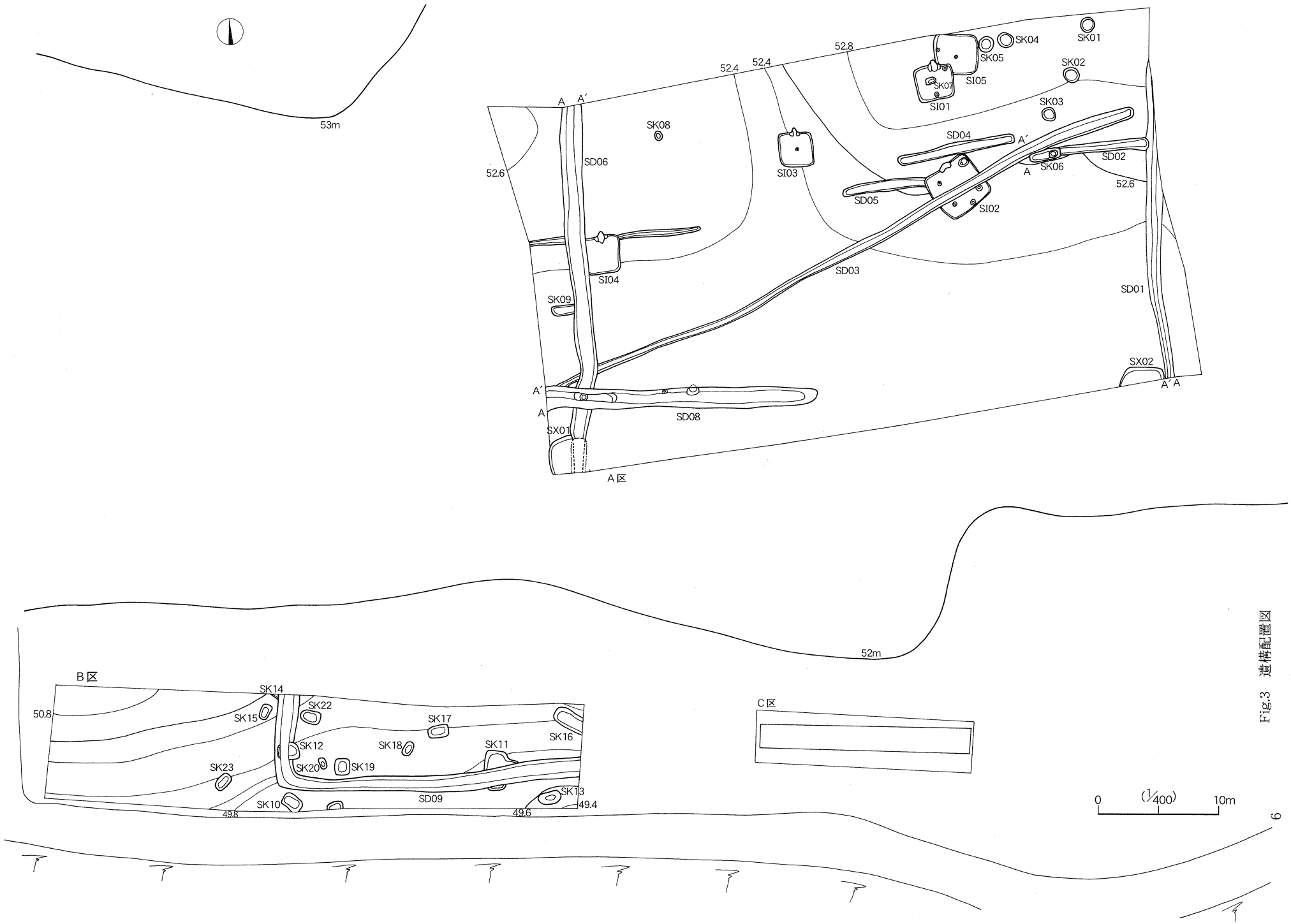

53m
52.8
52.4
52.4
52.6
52.6
A
A′
SK01
SK02
SK03
SK04
SK05
SK06
SK07
SK08
SK09
SI01
SI02
SI03
SI04
SI05
SD01
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
SD08
SX01
SX02
A区
52m
B区
50.8
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
SK19
SK20
SK22
SK23
SD09
49.8
49.6
49.4
C区
0
(1/400)
10m

Fig.3 遺構配置図

第Ⅱ章　検出された遺構と遺物

第１節　概要

本調査では縄文時代から近世に至るまでの遺構・遺物が確認されているが、継続されたものではなく、縄文時代、古代、中世の遺構が確認されている。縄文時代では中期の竪穴住居跡１軒、古代では竪穴住居跡のほかに溝状遺構や土坑を検出した。また中世は遺物を含め比較的まとまりある遺構を確認している。とくに溝状遺構については隣接する「宇留野城跡」との関わりで十分注意を要する遺構のひとつであり、また南側堀は外堀と推定されている。なお、断片的であるが弥生時代では遺物のみ出土している。

第２節　縄文時代（Ｆig.４～６）

１．竪穴住居跡

縄文中期と推定される竪穴住居跡１軒が検出されている。方形系統に属するもので、覆土中から胴部下半部の深鉢土器が出土している。無文で明確な時期を決定できないが、大木８(b)式と推定される。

住居跡ＳＩ05（Fig.４・５）

位置　調査区のＡ区北東側。標高52.65～52.86mに位置する。

規模・構造　長軸3.52m、短軸3.24mで、平面形態は隅丸方形を呈する。なお、南東コーナーで竪穴住居跡ＳＩ01に切られ、北西壁の一部が未調査区域に入っている。

主軸方位　長軸を主軸とするとＮ－２°－Ｗを示す。

壁　確認面からの深さは８～29cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

床　ほぼ平坦で、若干北側が低くなっている。直床で、明瞭な硬化面は少なく、床面中央付近にわずかに認められる。

炉　検出できなかった。

ピット　柱穴は２本検出されている。西壁中央のＰ１は形状が円形で、径24×25cm、深さ44cmを測る。また住居跡中央に位置するＰ2は、形状は楕円形で、径23×28cm、深さ51cmを測るセンターピットである。

覆土　２層が確認された。いずれも自然堆積土層である。上層である１層黒褐色土は微量のローム粒を含む。床面に接する２層黒褐色土は少量のローム粒を含む。しまりがあり、粘性がとむ。

遺物　（Fig.５）住居跡西側壁中央付近から胴部下半部の深鉢土器が出土した。底径10.0cm、現存器高18.0cmを測る。平底の底部から体部は直線的に立ち上がる。現存では文様施文は確認できず、上半は縦位、下半は横位のヘラナデ。底部は網代痕が認められる。胎土に雲母・石英・長石粒を多量に含み、色調は橙色(５ＹＲ6/6)を呈する。胎土から判断して中期・大木８(b)式土器と推定される。

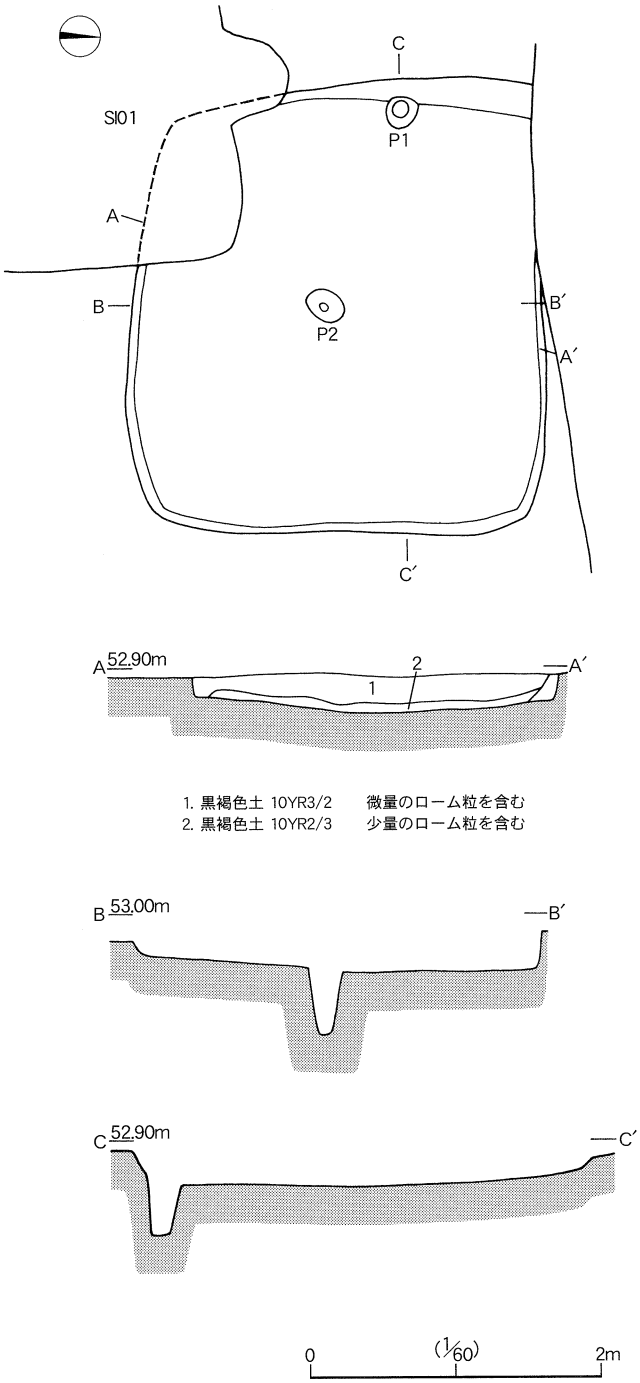


Fig.4　住居跡SI05実測図

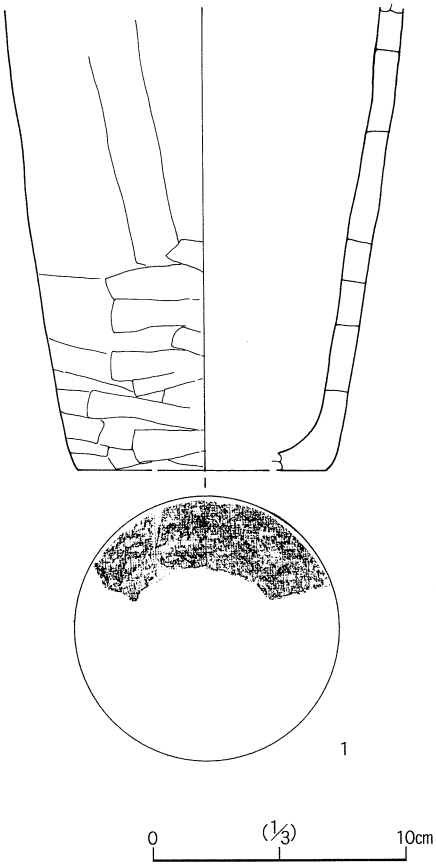


Fig.5　住居跡SI05出土遺物

所見　隅丸方形を呈する、２本柱構造の住居跡である。炉址は検出できなかったが、センターピットを伴い、覆土西側から胴部下半の深鉢土器が出土している。無文で明確な時期を決定できないが、大木８(b)式と推定される。

２．遺構外出土遺物（Fig.６）

今回の調査において縄文時代の住居跡以外からも遺物が出土している。とくに縄文遺構を切って構築している住居跡ＳＩ01と中世溝と推定される溝ＳＤ08からまとまっていた。なお、いずれも中期のみに限定されている。

土器（Fig.６－１～９）１は中葉阿玉台式土器である。胴部破片で貝殻復縁文による刺突文で指頭圧痕文を置換したものである。胎土に雲母、石英粒を多量に含む。2～９は後葉大木８ｂ式および加曽利Ｅ式土器である。２は口縁部に近い破片。沈線が沿う隆帯区画文で、地文に単節ＲＬ縄文の横位施文。胎土に石英・長石粒を含む。３は頸部付近の破片。単節ＲＬを地文に重畳する沈線による区画文をもつ。胎土に雲母・石英・黒色粒子・長石粒を含む。大木８ｂ式である。４は胴部破片。縄文地文に沈線によるモチーフを描出する。胎土に雲母・石英・長石粒を含む。５は頸部下位の破片。キャリパー形の深鉢で、沈線が沿う隆帯区画文に、磨消懸垂文が垂下する。器面の磨耗が著しく原体は不明。胎土に石英・長石粒を含む。６はやや大形の深鉢と推定する胴部破片である。単節LRを地文にやや幅広い磨消懸垂文を垂下させる。胎土に石英・長石・スコリア粒を含む。加曽利Ｅ３式土器。７も単節LRを地文に、沈線によって区画された懸垂文を垂下させる。胎土に石英・長石・スコリアを含む。加曽利Ｅ２式末もしくはＥ３式初頭。８は口縁部破片で、単節RL縄文を地文に、浅い沈線が沿う微隆起帯は曲線による区画文を表出する。加曽利Ｅ３式と推定する。９は深鉢の口縁部破片である。ほぼ直線的に外傾して立ち上がる。口縁部は無文、区画文は微隆起文で、胴部は６本単位の櫛歯状工具による縦位の条線文である。胎土に微細な石英粒を含む。

石器（Fig.６－12～14）12は打製石斧である。短冊形を呈し、完存品である。扁平な礫の表裏面周縁に調整剥離が施され、裏面には自然面が一部残置している。粘板岩製で、長さ12.19cm、幅6.00cm、厚さ2.48cm、重さ210gを測る。表採資料である。13は砂岩製の磨石である。約半分以上が欠損している。表面に磨面が明瞭に残り、側面にも磨面と敲打痕が認められる。現存長6.25cm、幅7.58cm、厚さ2.98cm、重さ116gを測る。14は二次加工のある剥片である。チャート製で、下縁部に調整剥離が認められる。長さ2.20cm、幅3.03cm、厚さ0.65cm、重さ3.96gを測る。

第３節　弥生時代（Ｆig.６－１０・１１）

弥生時代は、遺物のみで弥生時代後期の壺破片が２点出土したのみである。10は壺形土器の口縁部破片である。口縁部は大きく外反し、折り返し口縁を呈する。口縁部下端部はヘラ状工具による刺突列が巡る。口縁部外面および口唇部には付加条縄文が施文されている。頸部はヘラによる浅い沈線文が施されている。内面はヘラナデによって整形されている。胎土に石英・長石粒を含み、焼成は良好で、色調は黒褐色

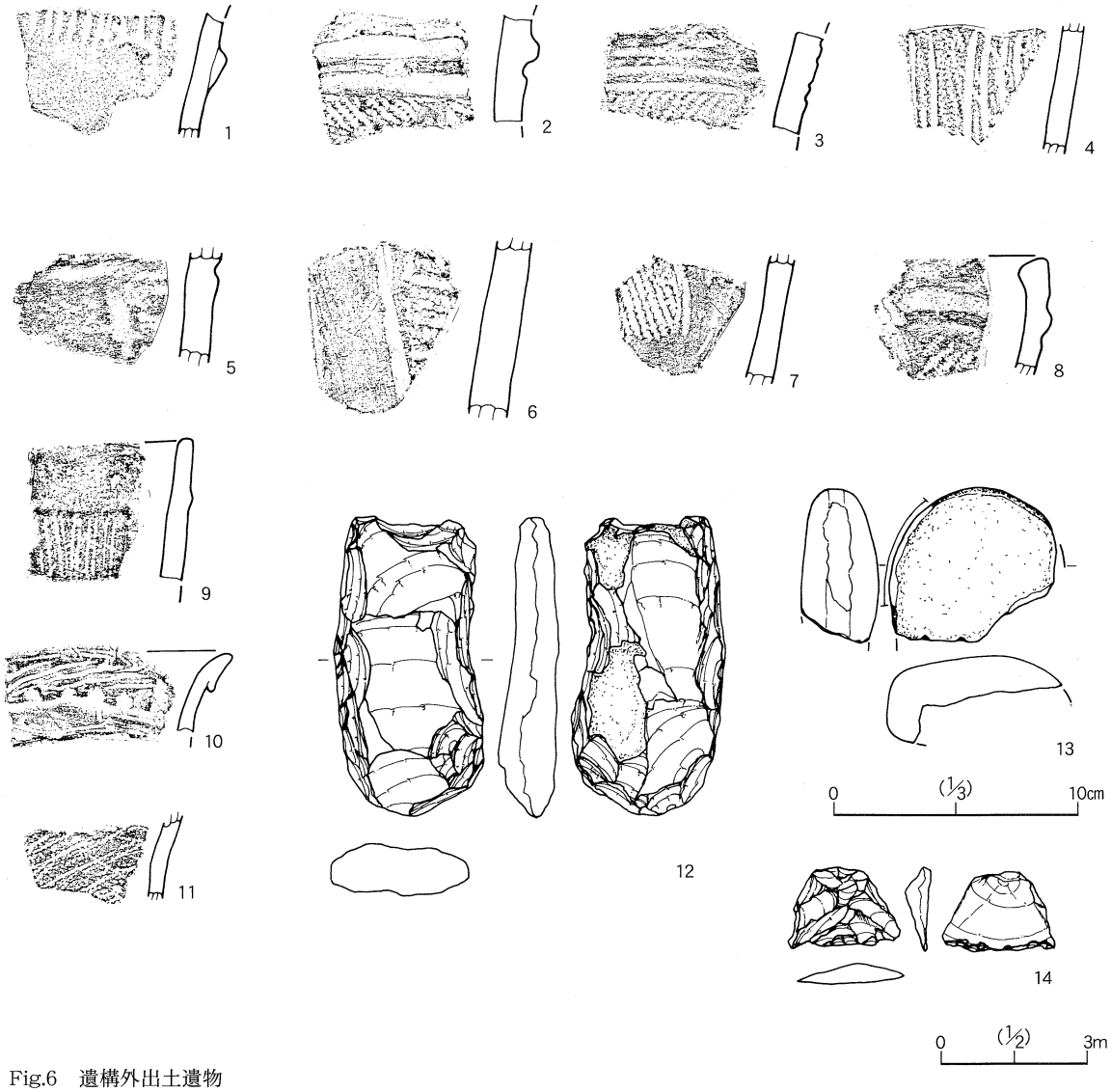


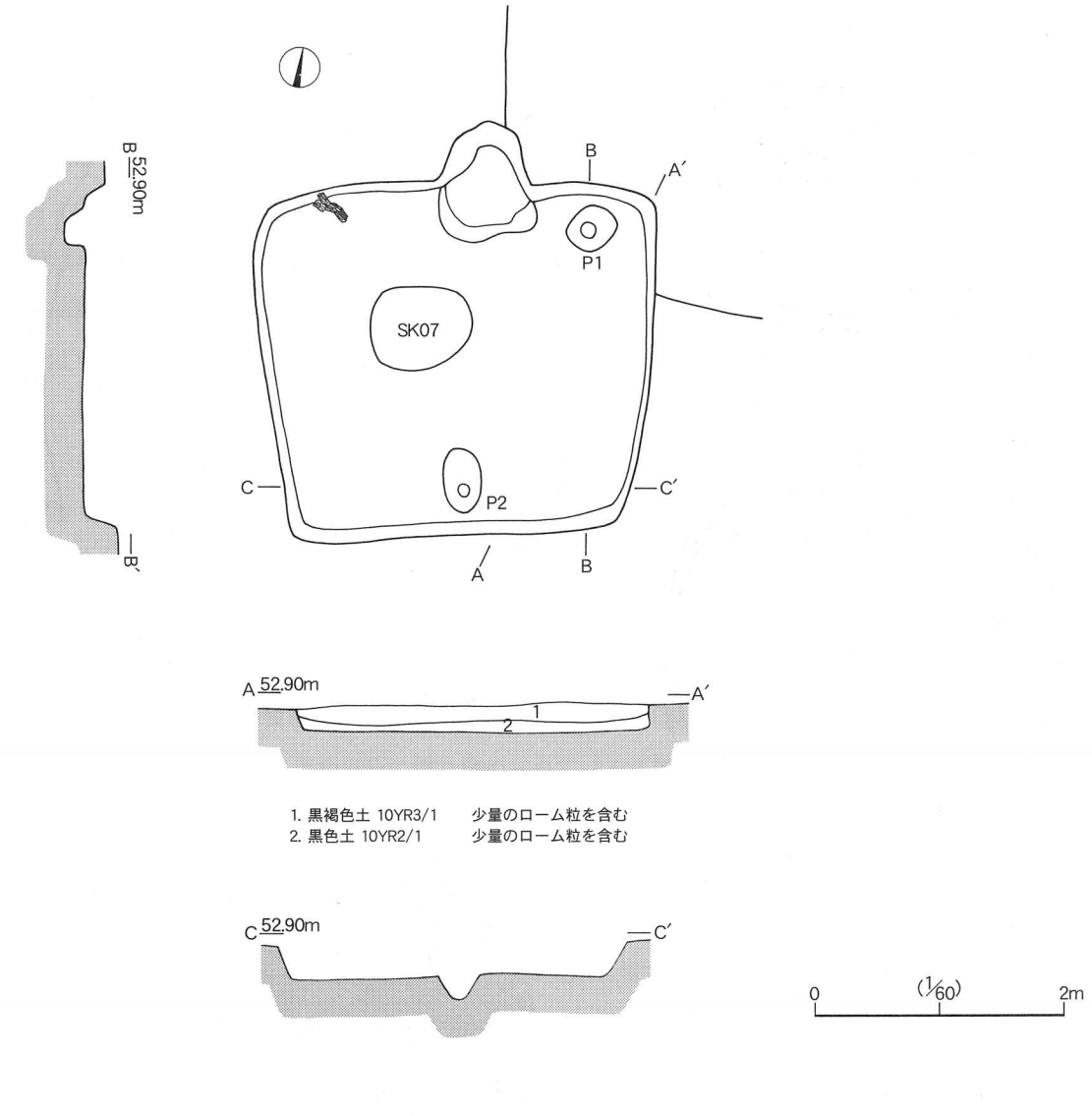
Fig.6　遺構外出土遺物

(10YR3/2) を呈する。11は胴部破片である。付加条縄文を施文している。胎土に石英・長石粒を含み、焼成は良好で、色調は暗褐色 (10YR3/3) を呈する

第４節 古代（Fig.７～１８）

１．竪穴住居跡

奈良・平安時代と推定される竪穴住居跡４軒が検出されている。全体的に出土遺物は少なく、時期を決定する資料が十分ではないが、８世紀および９世紀代に比定される。



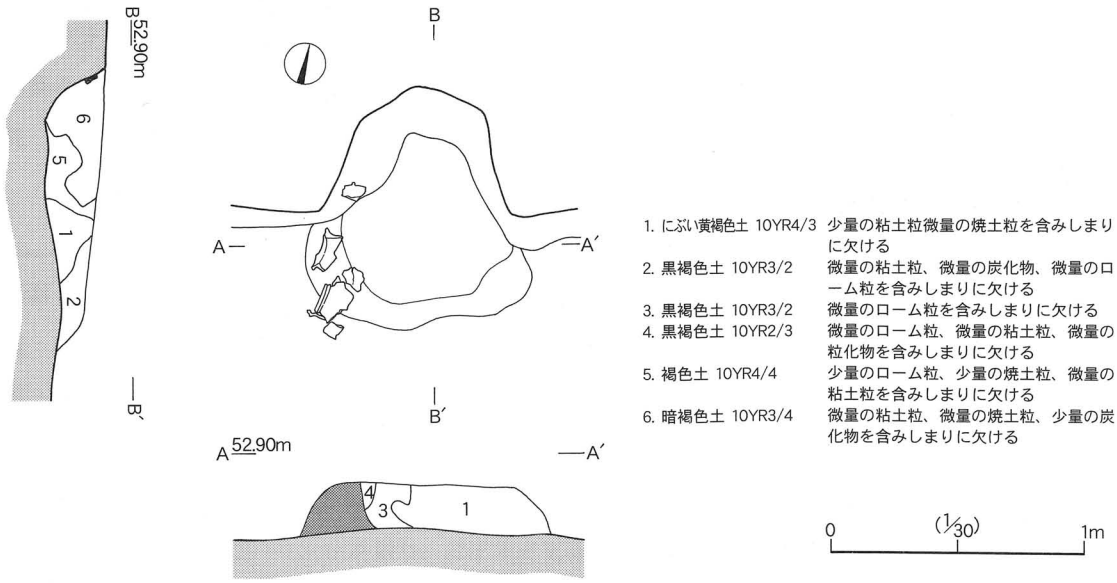


Fig.7　住居跡SI01実測図

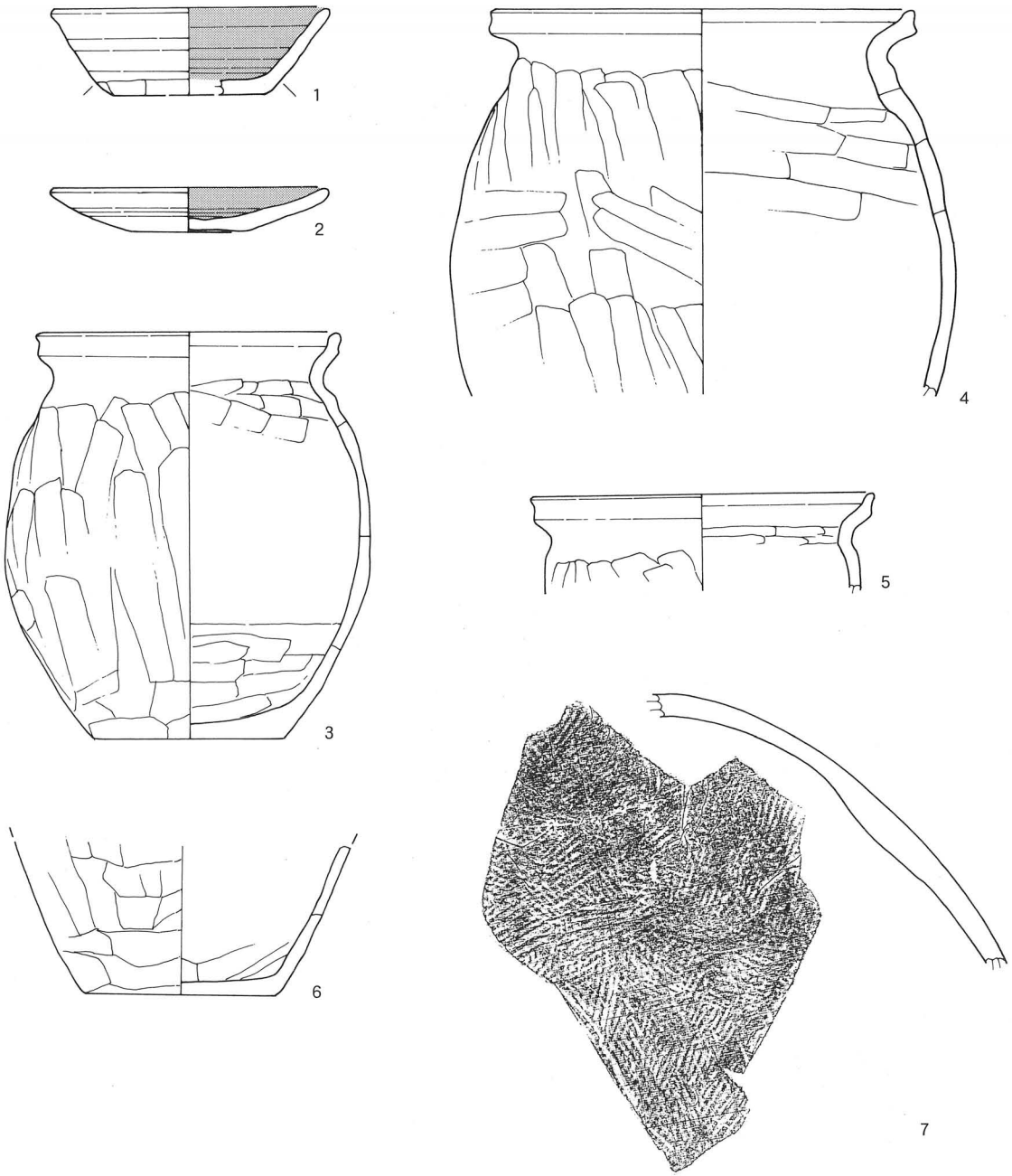


Fig.8　住居跡SI01出土遺物

0　(1/3)　10cm

住居跡ＳＩ01（Fig.７・８）

位置　調査区のＡ区北東側。標高52.65～52.86mに位置する。

規模・構造　長軸3.12m、短軸2.85mで、平面形態は方形を呈する。なお、北東コーナーで縄文住居跡であるＳＩ05を切って構築している。

主軸方位　北壁にカマドが設置されており、主軸はＮ－９°－Ｗを示す。

壁　確認面からの深さは17～26cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

床　ほぼ平坦で、若干東側が低くなっている。貼床で、硬化面はカマド前面および床面中央付近が顕著であった。掘形は全面的に認められる。

ピット　主柱穴とするものはなく、カマド脇Ｐ１および南壁中央Ｐ２の２本柱である。Ｐ１は北東コーナーに位置し、形状は円形で、径33×38cm、深さ18cmを測る。Ｐ2は入口部の梯子穴に相当し、形状は楕円形で、径29×51cm、深さ18cmを測る。

カマド　北壁ほぼ中央に構築されている。主軸方位は住居跡と一致する。なお、大半が破壊され、その痕跡のみが残存している。したがってカマド堀形のみを計測すると、規模は長さ96cm、幅72cmの浅い掘り込みで、袖部は灰白色砂質粘土を構築材に、黒褐色土・ローム粒子を混入して造られている。燃焼部は径66×68cm、深さ5cmの不正楕円形に掘り窪められている。奥壁は60°の角度で立ち上がり、煙道部へ移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅72cm、奥行48cmを測る。覆土は６層確認されているが、撹乱を受けているため、土層が乱れ複雑になっている。なお左袖部には土師器甕がまとまって出土した。

覆土　２層が確認された。いずれも自然堆積土層である。上層である１層黒褐色土は少量のローム粒を含む。床面に接する２層黒色土も少量のローム粒を含む。

遺物　（Fig.８）土師器坏、皿、甕および須恵器甕の破片が出土している。１は土師器坏でロクロ成形。器高に対して口径が大きい。体部下端は手持ちヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後、黒色処理を施している。２は土師器皿でロクロ成形。体部下半部は回転ヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後、黒色処理。３～６は土師器甕。３～５は口縁部破片で、口縁部は外反し、端部で上方へ摘み上げられる。７は須恵器大甕の破片である。外面タタキ目で調整している。

所見　カマド西側で炭化物が検出されているが、火災住居ではない。土師器坏や皿の出土遺物から判断して、９世紀後半と推定される。

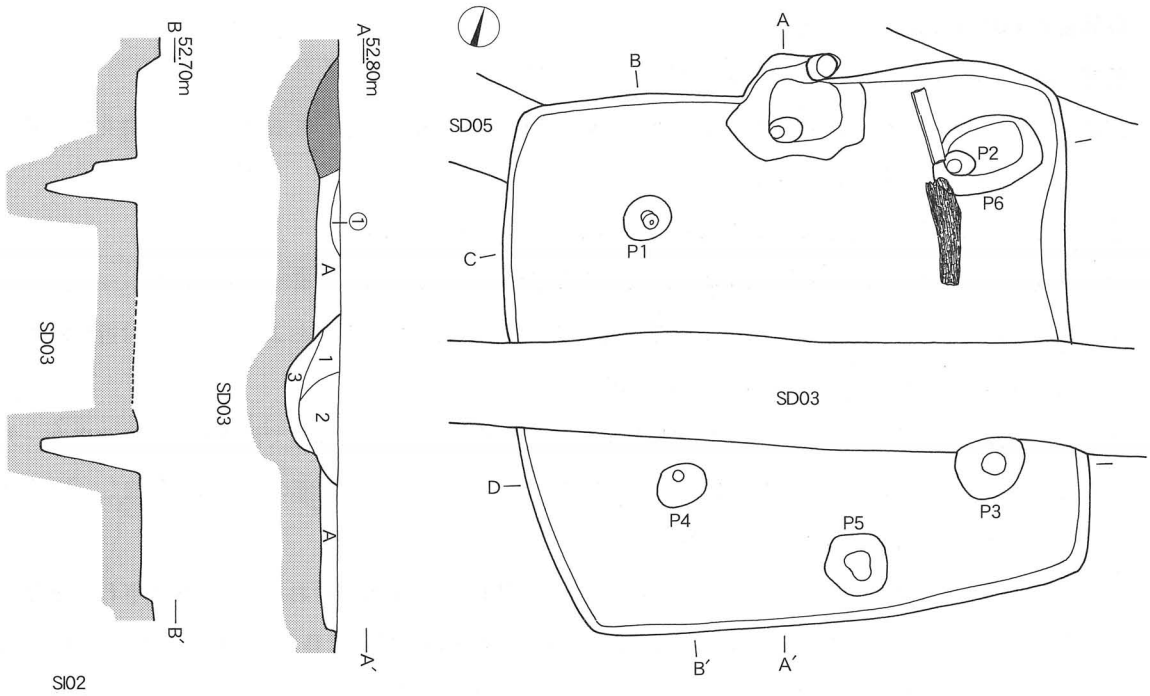
住居跡ＳＩ02（Fig.９～10）

位置　調査区のＡ区東側。標高52.51～52.60mに位置する。

規模・構造　長軸4.23m、短軸4.41mで、平面形態は方形を呈し、ほぼ中央東西に走る溝ＳＤ３によって切られ、さらに北東コーナーで溝ＳＤ４、北西コーナーで溝ＳＤ５によって切られている。

主軸方位　北壁にカマドが設置されており、主軸はＮ－27°－Ｗを示す。

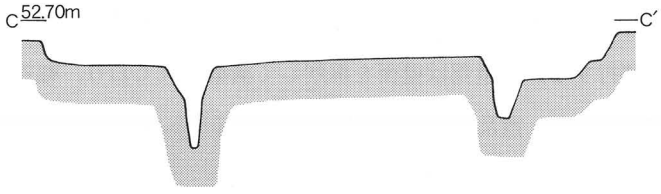
壁　確認面からの深さは9～13cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

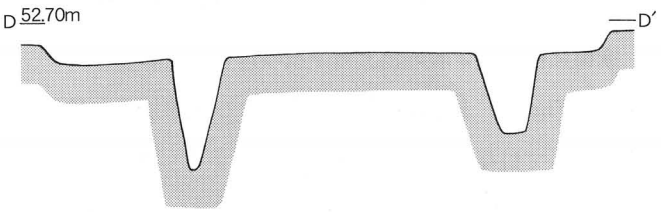


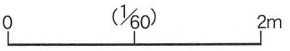
SI02
A　黒褐色土 10YR3/2　少量のローム粒、ロームブロックを含む

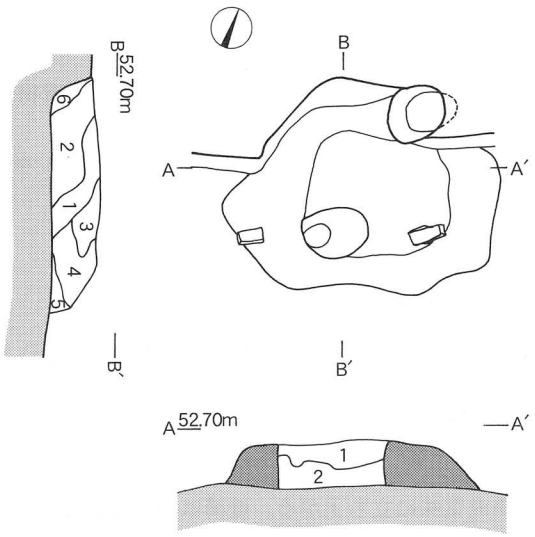
SD03
1. 黒褐色土 10YR2/3　少量のローム粒を含む
2. 黒色土 10YR2/1　微量のローム粒を含む
3. 黒褐色土 10YR2/2　多量のローム粒、ロームブロックを含む

SD05
① 黒褐色土 10YR3/1　微量のローム粒を含む









1. 暗褐色土 7.5YR3/4　少量のローム粒、少量の炭化粒、微量の粘土粒、微量の焼土粒を含みしまりに欠ける
2. 褐色土 10YR4/6　微量のローム粒、少量の炭化粒、少量の粘土粒、少量の焼土粒を含みしまりに欠ける
3. にぶい黄褐色土 10YR4/3　少量のローム粒、少量のロームブロック、少量の粘土粒、微量の炭化粒、微量の焼土粒を含みしまりに欠ける
4. 暗褐色土 10YR3/3　少量のローム粒、微量の炭化粒、微量の焼土粒を含みしまりに欠ける
5. にぶい黄褐色土 10YR4/3　微量のローム粒、微量のロームブロック、少量の粘土粒、少量の炭化物を含みしまりに欠ける
6. にぶい黄褐色土 10YR5/4　多量のローム粒を含みしまりに欠ける

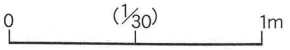


Fig.9　住居跡SI02実測図

床　ほぼ平坦であるが、南東コーナー付近がやや低くなっている。貼床で、硬化面はカマド前面および床面中央付近が顕著であった。掘形は全面的に認められる。

ピット　Ｐ１～Ｐ４が主柱穴で４本柱住居の構造をもつ。Ｐ５は入口の梯子穴である。またＰ６はカマド東側にあり、Ｐ２と重複している土坑で、その形状から貯蔵穴と推定される。まず主柱穴Ｐ１は北西側に位置し、形状は円形で、径34×39cm、深さ75cmを測る。主柱穴Ｐ2は北東側に位置し、貯蔵穴Ｐ６と伴に検出された。形状は円形で径19×22cm、深さ30cmを測る。主柱穴Ｐ３は南東側に位置し、形状は円形で、径43×51cm、深さ61cmを測る。主柱穴Ｐ4は南西側に位置し、形状は円形で、径32×40cm、深さ60cmを測る。梯子穴Ｐ５は南壁際中央に位置し、形状は円形で、径51×53cm、深さ28cmを測る。またカマド東側で、北東コーナー付近に位置するＰ６は貯蔵穴と推定される。形状は長方形で、径59×80cm、深さ17cmを測る。

カマド　北壁ほぼ中央に構築されている。主軸方位は住居跡と一致する。大きく破壊され、原状を保っていない。規模は長さ80cm、幅108cmで、構築材は凝灰質砂岩を棒板状に切り出し組み立てカマドとしていたものと推定するが、すべて前面の床上に散在していた。燃焼部は径48×57cm、深さ1cmの楕円形に掘り窪められ、火床面は明瞭ではないが、燃焼部とほぼ一致する。奥壁は60°の角度で立ち上がり、煙道部へ移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅67cm、奥行30cmを測る。覆土は６層確認されている。上層の１層暗褐色土は少量の炭化粒、ローム粒を含み、下層の２層褐色土層は少量の粘土粒・炭化粒・焼土粒を含む。なお、構築材である凝灰質砂岩が床面に散在していたことから、カマド破壊は住居跡廃棄後、それほど時間を置かないで行なわれたものと推定される。

覆土　確認層は黒褐色土の単一層で、少量のローム粒、ロームブロックを含み、しまりがあり、粘性にとむ。自然堆積層である。

遺物　(Fig.10) 土師器坏、甕が出土している。１・２は土師器坏で、底部は丸みをもち、口縁部はわずかに外反する。口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。３・４は土師器甕の胴下半部の破片。３はやや丸みをもつ底部から体部は内湾気味に立ち上がる。体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。４は平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。体部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。

所見　床面上で炭化物が検出されているが、火災住居ではない。土師器坏の出土遺物から判断して、８世紀前半と推定される。

住居跡ＳＩ03 (Fig.11・12)

位置　調査区のＡ区北側。標高52.20～52.48mに位置する。

規模・構造　長軸2.87m、短軸2.72mで、平面形態は南北軸が僅かに長い方形を呈する。

主軸方位　北壁にカマドが設置されており、主軸はＮ－７°－Ｗを示す。

壁　確認面からの深さは５～18cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

床　貼床で、硬化面はカマド前面および床面中央付近が顕著であった。掘形は全面的に認められ、柱穴内

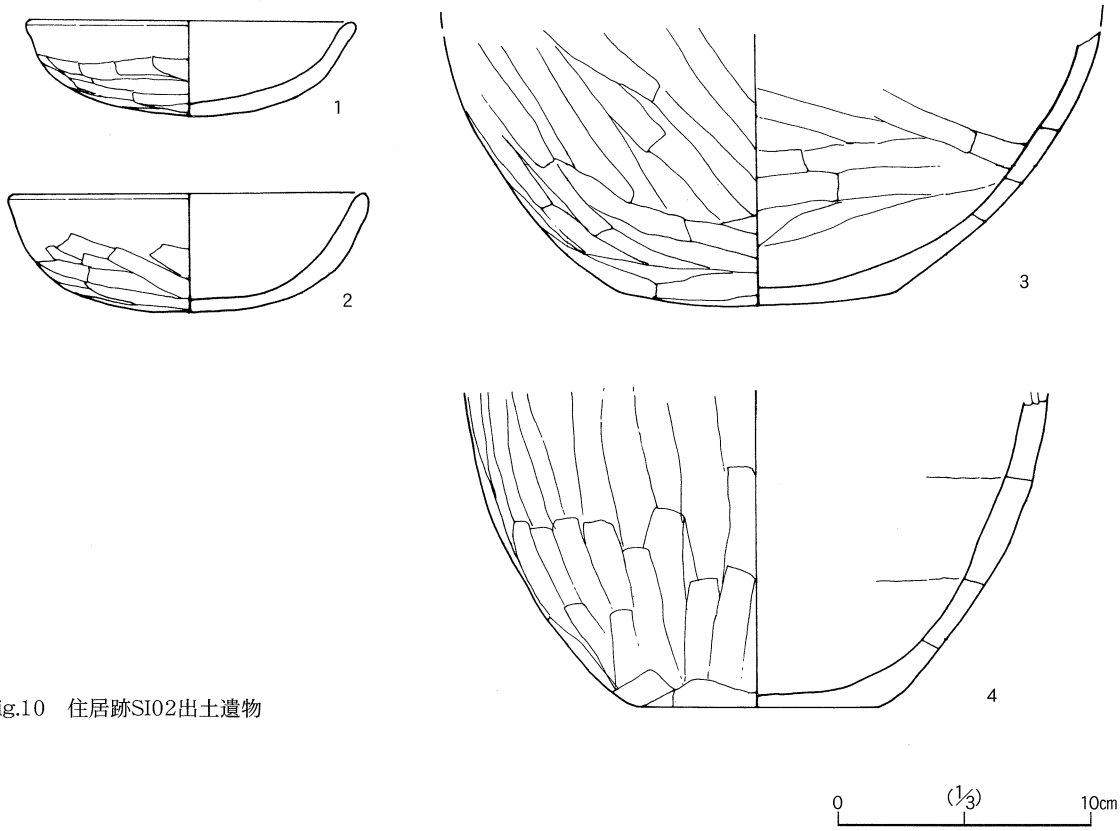


Fig.10　住居跡SI02出土遺物

は簡素な素掘りでる。

ピット　柱穴は住居跡中央に１本柱のみ検出されている。柱穴Ｐ１は形状が円形で、径21×29cm、深さ11cmを測る。

カマド　北壁ほぼ中央に構築されている。撹乱が著しく遺存状況はあまり良くない。主軸方位は住居跡と一致する。規模は長さ80cm、幅99cmで袖部は壁面に貼り付けら、灰白色砂質粘土を構築材に、黒褐色土・ローム粒子を混入して造られている。燃焼部は径33×40cm、深さ９cmの楕円形に掘り窪められ、火床面は，燃焼部とほぼ一致する。奥壁は30°の角度で立ち上がり、煙道部へ移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅44cm、奥行51cmを測る。覆土は6層確認されているが、大半は構築材である２層粘土層で覆われ、煙道部に５層暗灰黄色土、および６層暗褐色土が堆積している。

覆土　２層が確認された。全体的に浅く床面覆土を覆っているのが２層褐色土、壁際に堆積しているのが１層黒褐色土である。いずれも多量のローム粒・ロームブロックを含み、埋め戻し土層である。

遺物　(Fig.12) 土師器甕の破片が出土している。口縁部破片で内湾する体部から頸部は垂直気味に立ち上がり、口縁端部は短く摘み上げられる。口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。

所見　出土遺物は少なく土師器甕の小破片のみで、９世紀代と推定される。

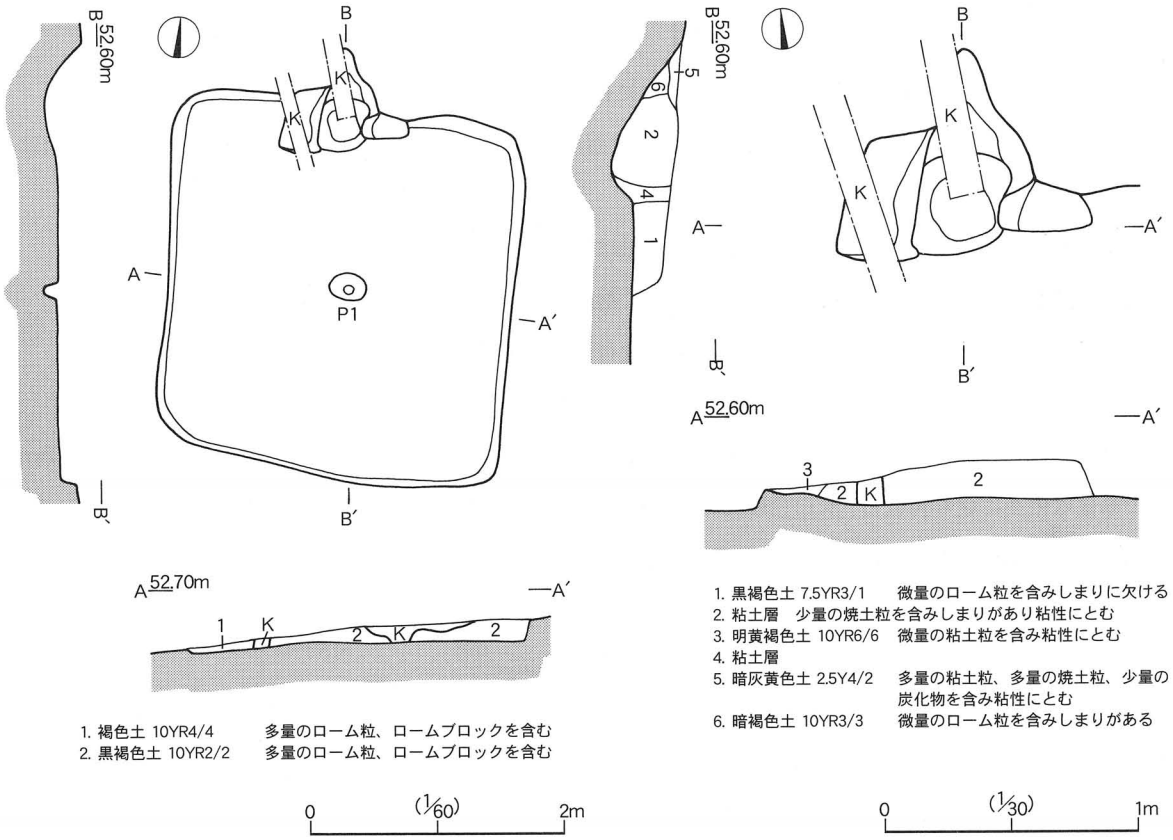


Fig.11　住居跡SI03実測図

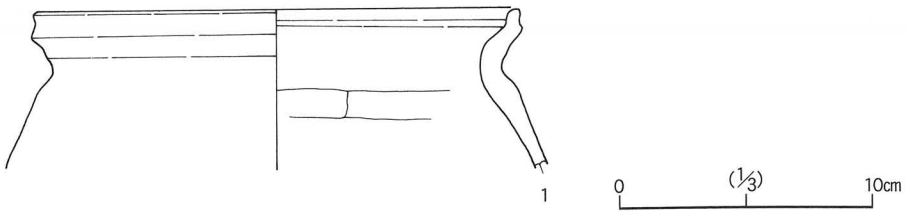


Fig.12　住居跡SI03出土遺物

住居跡ＳＩ04（Fig.13・14）

位置　調査区のＡ区西側。標高52.35～52.47mに位置する。

規模・構造　長軸3.20m、短軸2.66mで、西側壁面が中世溝ＳＤ06によって切られている。平面形態は方形を呈するものと推定される。

主軸方位　北壁にカマドが設置されており、主軸はＮ－５°－Ｗを示す。

壁　確認面からの深さは12～21cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

床　貼床で、硬化面はカマド前面および床面中央付近が顕著であった。掘形は全面的に認められる。

ピット　柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁ほぼ中央に構築されている。主軸方位は住居跡と一致する。規模は長さ107cm、幅111cmで袖部は壁面に貼り付けら、灰白色砂質粘土を構築材に、黒褐色土・ローム粒子を混入して造られている。燃焼部は径60×84cm、深さ6cmの楕円形に掘り窪められ、火床面は径36×40cmを測る。奥壁は23°の角度で立ち上がり、煙道部へ移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅70cm、奥行45cmを測る。覆土は撹乱が激しく土層を確認できなかった。

覆土　確認層は黒褐色土の単一層で、多量のローム粒と少量のロームブロックを含み、しまりがあり、粘性にとむ埋め戻し土層である。

遺物　（Fig.14）土師器坏と須恵器坏および床面下から磨石が１点出土している。１は土師器坏で、ロクロ成形。体部下端は回転ヘラケズリによって面取りされ、底部は回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後、黒色処理を施している。２は須恵器坏で完形品である。ロクロ成形で、底部はヘラナデ。ヘラ記号が認められる。３は磨石の破片で、砂岩製である。扁平な円礫を使用し、現存長5.66cm、幅9.46cm、厚さ2.22cm、重さ159gを測る。磨耗痕は明瞭ではない。

所見　出土遺物である土師器坏および須恵器坏から判断して、９世紀後半と推定される。

２．溝状遺構（ＳＤ）（Fig.15・18）

古代と推定される溝状遺構は２条検出されている。調査Ａ区の東端で、南北に延びるＳＤ01と同じ調査区のほぼ中央を東西方向に走るＳＤ03である。いずれも遺物が出土しており、８世紀代に比定される。

溝状遺構ＳＤ01（Fig.15・18）

位置　調査区の東端で、北側から南側へ直線的に走り、南北両端はいずれも未調査区域に延びている。標高は52.16～52.76mで、北側が高く、南側が低く、その比高差は46cmを測る。

規模・構造　確認されている長さ23.20mで、幅70～140cm、深さ34～50cmで、逆台形に掘り込まれている。

主軸方位　主軸はＮ－３°－Ｗを示す。

壁　外傾しながら直線的に立ち上がる。

底面　やや鍋底状で丸みをもつ。明確な硬化面は確認できなかった。

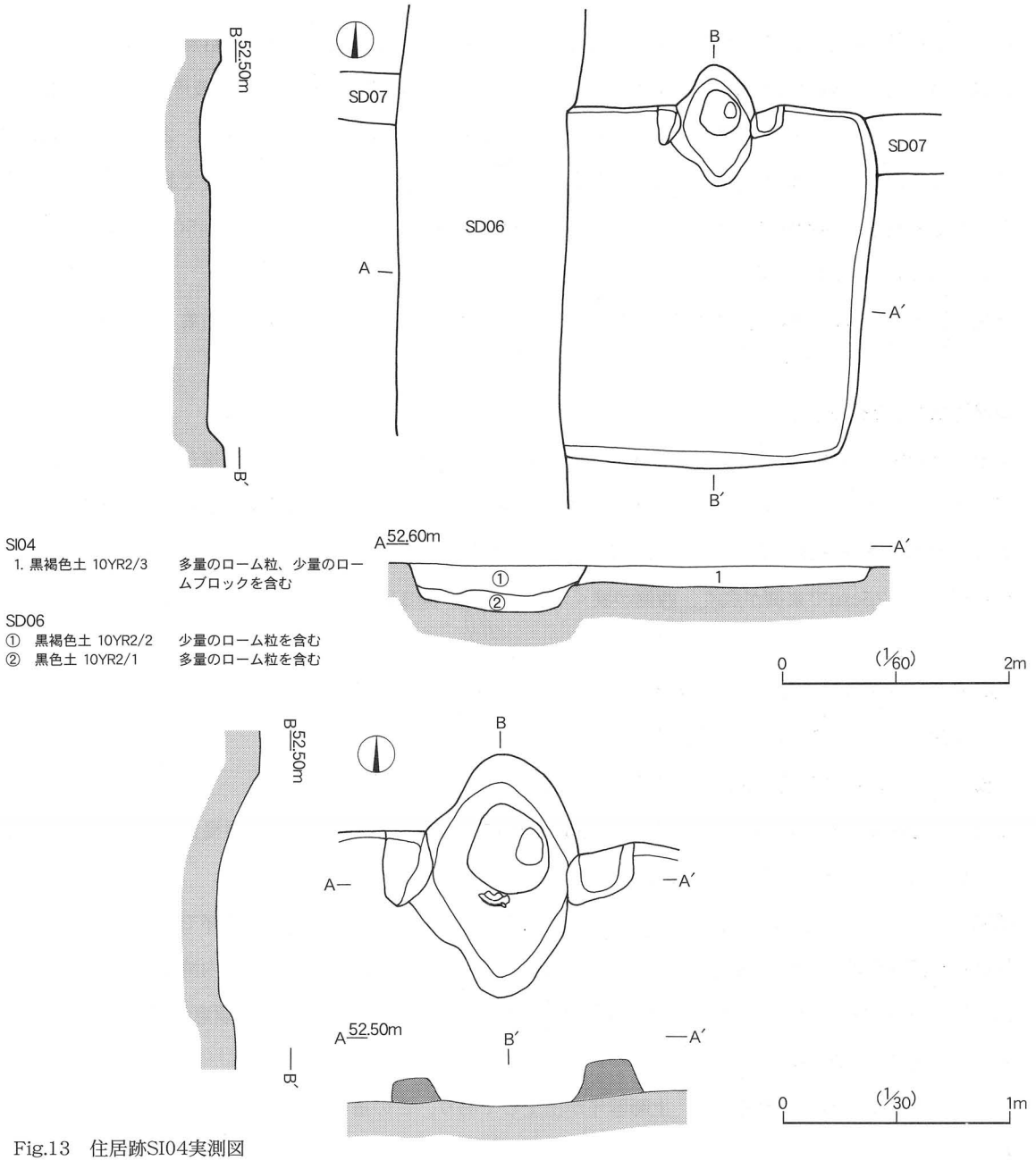


Fig.13　住居跡SI04実測図

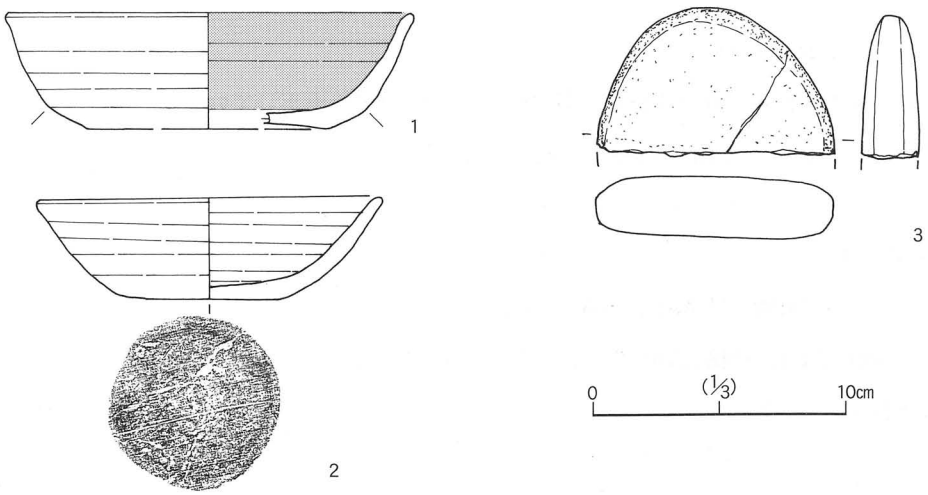


Fig.14　住居跡SI04出土遺物

覆土　黒褐色土の単一層で、少量のローム粒を含み、しまりがあり、粘性にとむ。自然堆積層である。

遺物（Fig.18）須恵器高台付坏、砥石が出土している。１は須恵器高台付坏の底部破片で、ロクロ成形。高台は「ハ」の字状に開き、体部は下端で屈曲し、ほぼ直線的に外傾して立ち上がる。２は結晶片岩製の砥石の破片である。現状は扁平で台形状を呈し、表面は使用が激しくよく磨耗し平滑である。また上側面と左側面も研磨痕が明瞭である。なお左側面には刃先の擦痕が認められる。長さ11.50cm、幅4.45cm、厚さ1.65cm、重さ97gを測る。

所見　覆土中から須恵器高台付坏が出土しており、この遺物から判断して、９世紀前葉と推定される。

溝状遺構ＳＤ03（Fig.15・18）

位置　調査区の中央を東西に横断する溝で、東側から西側へほぼ直線的に走り、西端が未調査区域に延びている。標高は52.16～52.76mで、東側が高く、西側が低く、その比高差は73cmを測る。

規模・構造　西側が未調査区域に入るため、全容を把握できないが、確認されている長さ53mである。また幅40～125cmで東側が広く、西側が狭くなっている。深さ22～34cmで、逆台形に掘り込まれている。

主軸方位　主軸はＮ－62°－Ｅを示す。

壁　外傾しながら直線的に立ち上がる。

底面　平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。

覆土　２層確認されている。上層の黒褐色土は少量のローム粒を含み、下層の2層褐色土は多量のローム粒・ロームブロックを含み、自然堆積層である。

遺物　（Fig.18）須恵器坏、土師器坏、須恵器甕破片が出土している。３は須恵器坏で、ロクロ成形。口径に対し器高が低い。底部回転ヘラケズリ。４は土師器坏。平底の底部から体部は内湾気味に開き、口縁部は短く直立する。口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。５は須恵器大甕の胴部破片。外面タタキによる調整。

所見　覆土中から出土の須恵器坏、土師器坏が出土しており、この遺物から判断して、８世紀代と推定される。

３．土坑（ＳＫ）（Fig.16～18）

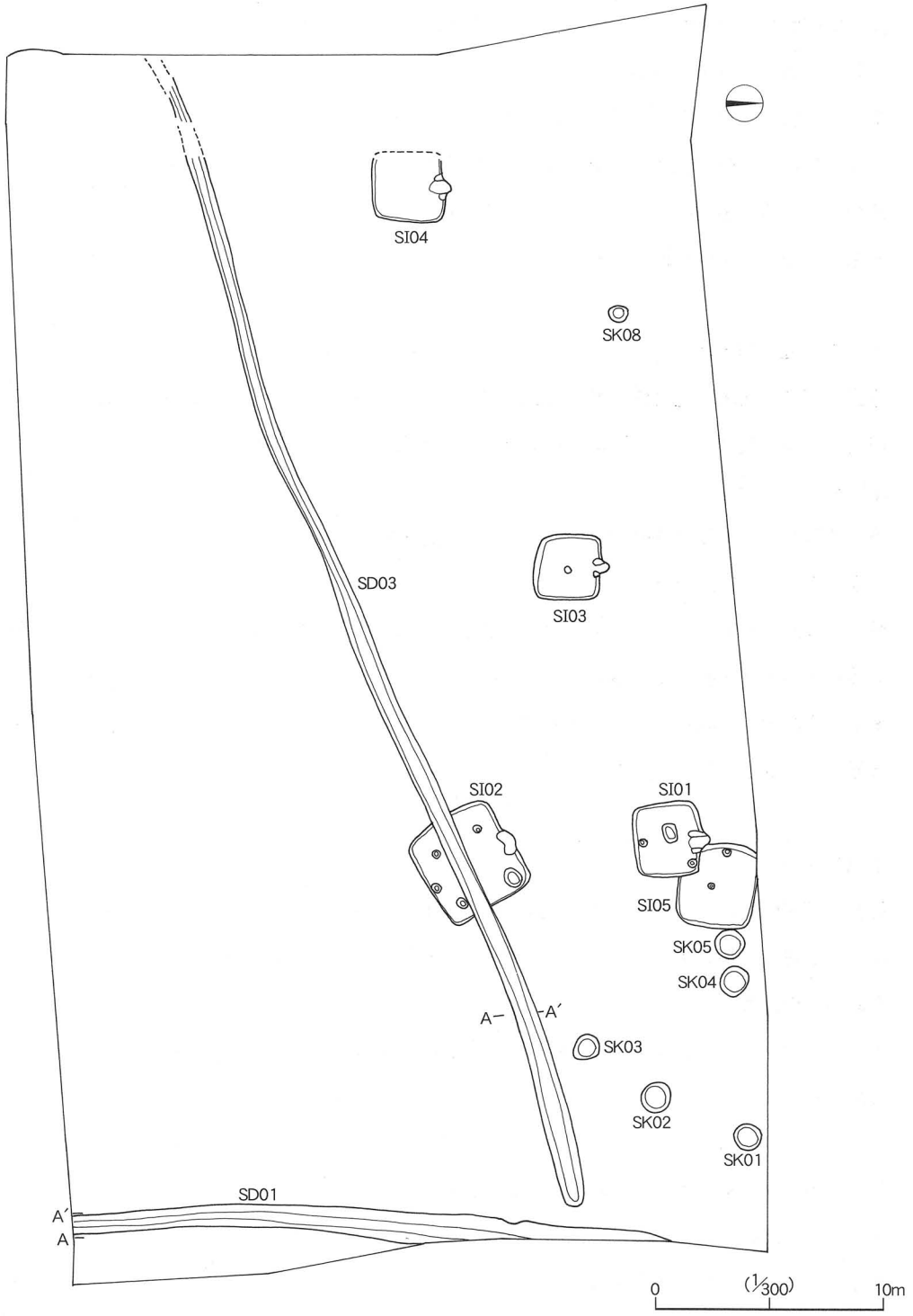
円形を基本に、長方形土坑が検出された。遺物は土坑ＳＫ07のみ出土しているが、他は図示できるものは検出されていない。覆土の状況から判断して８～９世紀代に属するものとした。

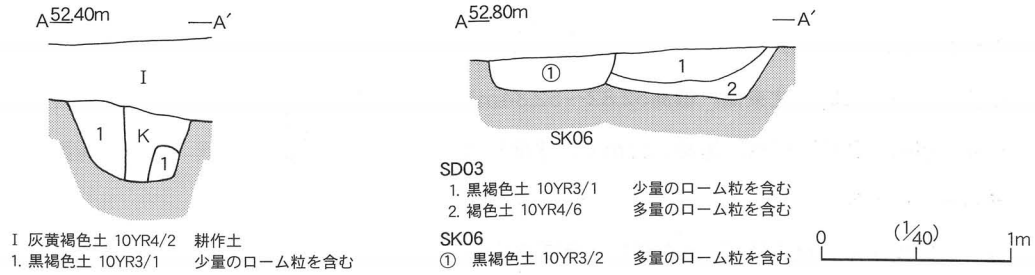
土坑ＳＫ01（Fig.16）

位置　調査区Ａ区の北東側。標高52.75～52.83mに位置する。

規模・構造　長軸1.24m、短軸1.23mで、平面形態は円形を呈する。

断面形　円筒形





SD03
1. 黒褐色土 10YR3/1　少量のローム粒を含む
2. 褐色土 10YR4/6　多量のローム粒を含む

SK06
① 黒褐色土 10YR3/2　多量のローム粒を含む

Ⅰ 灰黄褐色土 10YR4/2　耕作土
1. 黒褐色土 10YR3/1　少量のローム粒を含む

Fig.15　溝状遺構SD01、03実測図

壁　確認面からの深さは35cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

底面　平坦で、直床である。

覆土　２層に分層できる。覆土の大半を覆っているのが、１層黒褐色土で、少量のローム粒を含み、底面に接している２層褐色土は多量のローム粒を含む。

遺物　土師器の小破片のみで、図示できる遺物はない。

所見　８～９世紀代と推定する。

土坑ＳＫ02（Fig.16）

位置　調査区Ａ区の北東側。標高52.76～52.80mに位置する。

規模・構造　長軸1.30m、短軸1.30mで、平面形態は円形を呈する。

断面形　円筒形

壁　確認面からの深さは57cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

底面　平坦で、直床である。

覆土　３層に分層できる。覆土の大半を覆っているのが、１層黒褐色土で、少量のローム粒を含み、底面に接している３層褐色土は多量のローム粒を含む。

遺物　土師器の小破片のみで、図示できる遺物はない。

所見　８～９世紀代と推定する。

土坑ＳＫ03（Fig.16）

位置　調査区Ａ区の北東側。標高52.72～52.78mに位置する。

規模・構造　長軸1.16m、短軸1.11mで、平面形態は円形を呈する。

断面形　円筒形

壁　確認面からの深さは30cmを測り、大半は垂直気味に立ち上がるが、部分的に外傾する。

底面　平坦で、直床である。

覆土　２層に分層できる。覆土の大半を覆っているのが、２層褐色土で、微量のローム粒を含み、壁際に接している１層褐色土は多量のローム粒を含む。

遺物　土師器の小破片のみで、図示できる遺物はない。

所見　８～９世紀代と推定する。

土坑ＳＫ04（Fig.16）

位置　調査区Ａ区の北東側。標高52.82～52.84mに位置する。

規模・構造　長軸1.31m、短軸1.21mで、平面形態は円形を呈する。

断面形　円筒形

壁　確認面からの深さは47cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

底面　平坦で、直床である。

覆土　４層に分層できる。覆土の上層を覆っているのが、１層黒褐色土で、微量のローム粒を含み、中層の２層黒褐色土は少量のローム粒を含み、壁際に接している３層黄褐色土は多量のローム粒を含み、底面に接している４層褐色土は多量のローム粒を含む。

遺物　土師器の小破片のみで、図示できる遺物はない。

所見　８～９世紀代と推定する。

土坑ＳＫ05（Fig.16）

位置　調査区Ａ区の北東側。標高52.74～52.80mに位置する。

規模・構造　長軸1.28m、短軸1.26mで、平面形態は円形を呈する。

断面形　円筒形

壁　確認面からの深さは31cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

底面　平坦で、直床である。

覆土　２層に分層できる。覆土の大半を覆っているのが、１層黒褐色土で、微量のローム粒を含み、底面に接している２層暗褐色土は少量のローム粒を含む。

遺物　土師器の小破片のみで、図示できる遺物はない。

所見　８～９世紀代と推定する。

土坑ＳＫ07（Fig.16・18）

位置　調査区Ａ区の北側。標高52.54～52.56mに位置する。住居跡ＳＩ01のほぼ中央に構築されている。

規模・構造　長軸0.82m、短軸0.66mで、平面形態は楕円形を呈する。

断面形　円筒形

壁　確認面からの深さは11cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

底面　平坦で、直床である。

覆土　黒褐色土の単一層である。少量のローム粒を含む。

遺物　（Fig.18）土師器甕の口縁部破片が出土している。体部は内湾気味に立ち上がり、頸部は緩く屈曲し、口縁部は外反し、端部で摘み上げられる。口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。

所見　出土遺物から判断して９世紀代と推定する。

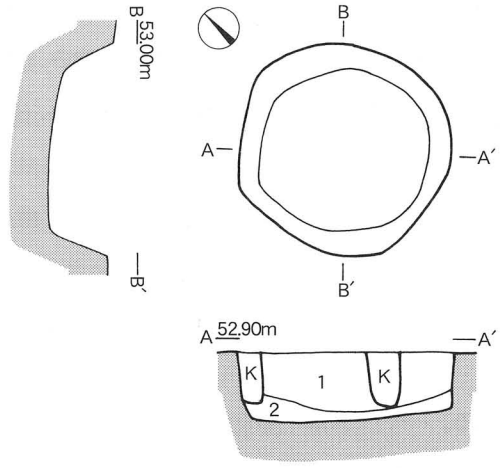
土坑ＳＫ08（Fig.17）

位置　調査区Ａ区北西側。標高52.62mに位置する。

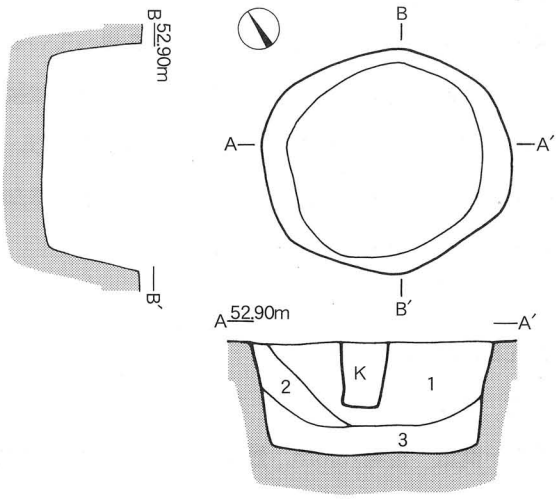
規模・構造　長軸0.80m、短軸0.78mで、平面形態は円形を呈する。

断面形　半円形

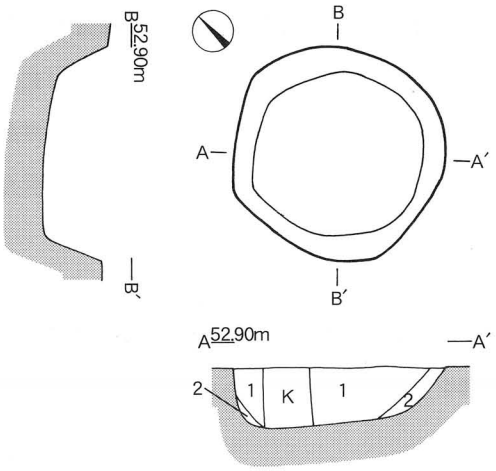
壁　確認面からの深さは29cmを測り、ほぼ鍋底状に開く。



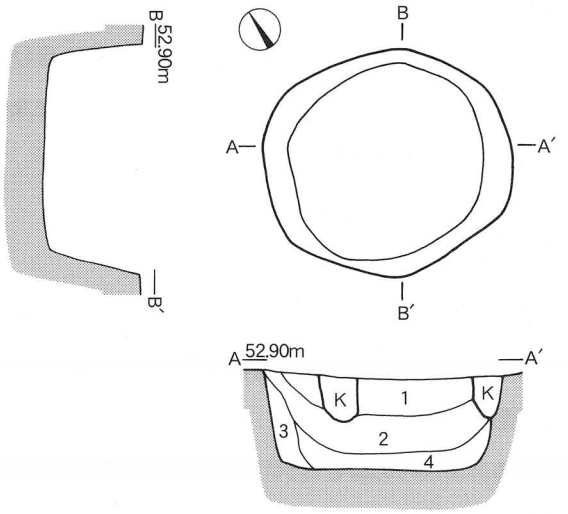
土坑SK01　1. 黒褐色土 10YR3/1　少量のローム粒を含む
2. 褐色土 10YR4/4　多量のローム粒を含む



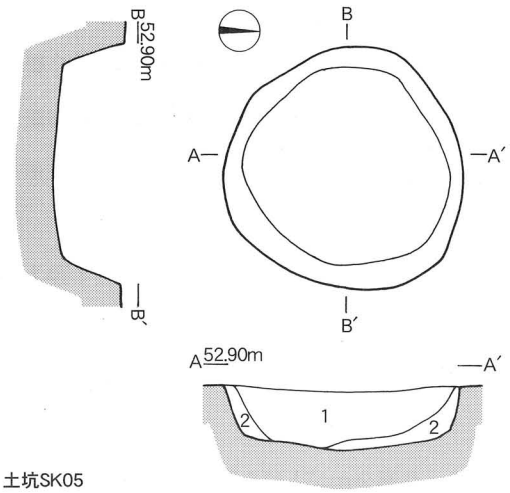
土坑SK02　1. 黒褐色土 10YR3/1　少量のローム粒を含む
2. 黒褐色土 10YR3/2　微量のローム粒を含む
3. 褐色土 10YR4/4　多量のローム粒を含む



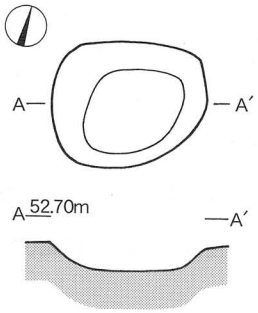
土坑SK03　1. 褐色土 10YR4/6　多量のローム粒を含む
2. 黒褐色土 10YR3/1　微量のローム粒を含む



土坑SK04　1. 黒褐色土 10YR3/1　微量のローム粒を含む
2. 黒褐色土 10YR3/2　少量のローム粒を含む
3. 黄褐色土 10YR5/6　多量のローム粒を含む
4. 褐色土 10YR4/6　多量のローム粒を含む



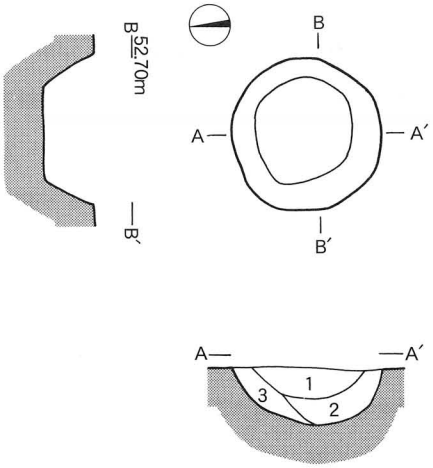
土坑SK05
1. 黒褐色土 10YR3/1　微量のローム粒を含む
2. 暗褐色土 10YR3/4　少量のローム粒を含む



土坑SK07

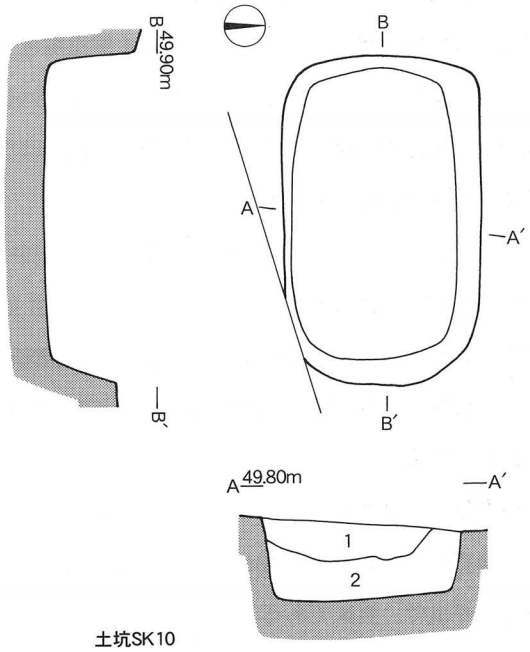
0　(1/40)　1m

Fig.16　土坑SK01、02、03、04、05、07実測図



土坑SK08

1. 黒褐色土 10YR2/2　少量のローム粒を含む
2. 暗褐色土 10YR3/3　少量のローム粒を含む
3. 褐色土 10YR4/6　多量のローム粒を含む

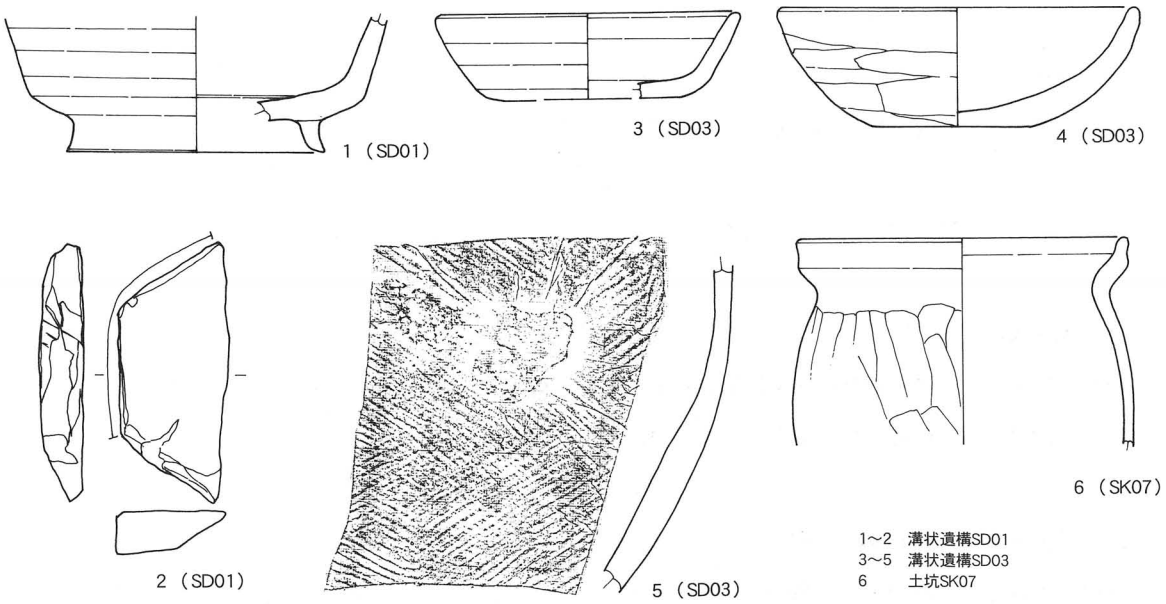


土坑SK10

1. 暗褐色土 10YR3/3　多量のローム粒、ロームブロックを含む
2. 褐色土 10YR4/4　多量のローム粒、ロームブロックを含む

0 (1/40) 1m

Fig.17　土坑SK08、10実測図



1～2　溝状遺構SD01
3～5　溝状遺構SD03
6　土坑SK07

0 (1/3) 10cm

Fig.18　溝状遺構SD01、03　土坑SK07出土遺物

底面　鍋底状を呈し、直床である。

覆土　３層に分層できる。覆土上層は１層黒褐色土で、少量のローム粒を含み、底面に接している２層暗褐色土は少量のローム粒を含む。壁際に接している３層褐色土は多量のローム粒を含む。

遺物　土師器の小破片のみで、図示できる遺物はない。

所見　８～９世紀代と推定する。

土坑ＳＫ10（Fig.17）

位置　調査区Ｂ区。標高49.56～49.78mに位置する。

規模・構造　長軸1.75m、短軸1.05mで、平面形態は隅丸長方形を呈する。

断面形　箱形

主軸方位　主軸はＮ－８９°－Ｅを示す。

壁　確認面からの深さは40cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

底面　平坦で、直床である。

覆土　２層に分層できる。覆土の上層を覆っているのが、１層暗褐色土で、多量のローム粒・ロームブロックを含み、底面に接し覆土の大半を覆っている２層褐色土は多量のローム粒・ロームブロックを含む。埋戻し土層である。

遺物　土師器の小破片のみで、図示できる遺物はない。

所見　８～９世紀代と推定する。

第５節　中世（Ｆig.６・７）

１．概要（Fig.６・７）

中世と推定される竪穴状遺構２基と溝状遺構条が検出されている。竪穴状遺構２基はいずれも未調査区域に広がり全貌を把握できていない。方形系の遺構であり、また溝状遺構は調査Ａ区において西端と南端で検出され、調査区Ｂ区では西側および南側を区画する方形区画溝が確認された。

２．溝状遺構（ＳＤ）（Fig.19・20・24・25）

中世と推定される溝状遺構は３条検出されている。調査区Ａ区において西端と南端で検出され、調査区Ｂ区では西側および南側を区画する方形区画溝が確認された。

溝状遺構ＳＤ06（Fig.16・24）

位置　調査Ａ区の西端で、北側から南側へ直線的に走り、南北両端はいずれも未調査区域に延びている。標高は51.92～52.60mで、北側が高く、南側が低く、その比高差はわずかに７cmを測るのみであるが、上層の確認面の比高差は53cmある。

規模・構造　確認されている長さ30.30mで、幅115～170cm、深さ22～75cmで、逆台形に掘り込まれている。

主軸方位　主軸はN－4°－Wを示す。

壁　外傾しながら直線的に立ち上がる。

底面　平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。

覆土　５層確認されている。上層の１層黒褐色土は微量のローム粒を含み、中層の2層黒褐色土は少量のローム粒を含み、下層の４・５は黒色で、ローム粒を含み、いずれも自然堆積層である。

遺物　(Fig.24) 覆土中より遺物が出土している。貿易磁器である中国産白磁小皿の底部破片がある。削り出し高台をもつ。また鉄片の破片が出土している。扁平な棒状を呈し、先端部が直角に折り曲げている。現存長3.88cm、幅1.24cm、厚さ0.59cmを測る。

所見　覆土中より中国産の白磁小皿が出土している。15世紀代と推定される。

溝状遺構ＳＤ08（Fig.19・24・25）

位置　調査Ａ区の南西側を東西に走る溝で、東側から西側へほぼ直線的に走り、西端が未調査区域に延びている。標高は51.81～52.15mで、東側が高く、西側が低く、その比高差は21cmを測る。

規模・構造　西側が未調査区域に入るため、全容を把握できないが、確認されている長さ22.30mである。また幅135～180cmで東側が狭く、西側が広くなっている。深さ28～90cmで、逆台形に掘り込まれている。

主軸方位　主軸はN－88°－Wを示す。

壁　外傾しながら直線的に立ち上がる。

底面　平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。

覆土　２層確認されている。上層の黒色土は少量のローム粒を含み、下層の2層黒褐色土は少量のローム粒を含み、自然堆積層である。

遺物　(Fig.24・25) 覆土中より比較的まとまりある遺物が出土している。瀬戸美濃系陶器、土師質土器である。瀬戸美濃系は平碗・茶壷、さらに志戸呂系擂鉢と内耳土鍋である。４・５は灰釉平碗で、口縁部破片である。古瀬戸後期。15世紀代。６は比較的大きな破片で、僅かに接合する資料により復元実測した。外面には鉄釉がかかり、比較的大きな茶壷である。古瀬戸後期。15世紀代。７は志戸呂系擂鉢で、見込みの櫛目は７本単位で、櫛目単位は間隔をあけ施す。８・９は土師質土器の内耳土鍋である。また鉄製品として10刀子の破片がある。刃部と茎部の一部のみで銹化が著しく正確な計測は不可能であるが、刃部は切先部が、茎部は茎尻部が欠損している。現存長さ5.51cm、刃部幅1.37cm、背厚0.26cm、茎幅1.24cm、茎厚0.40cmを測る。その他石製品として凝灰岩製の砥石がある。方柱状を呈し、下端部が欠損している。磨耗面は表裏面および側面の４面と先端面の計５面すべてに認められ、使用頻度が著しいことがわかる。現存長9.22cm、幅2.61cm、厚さ1.94cm、重さ73gを測る。またＦig.25－１は粘板岩製の硯である。先端部の欠損後、裏面を削り直し再利用している。略楕円形を呈し、現存長10.40cm、幅

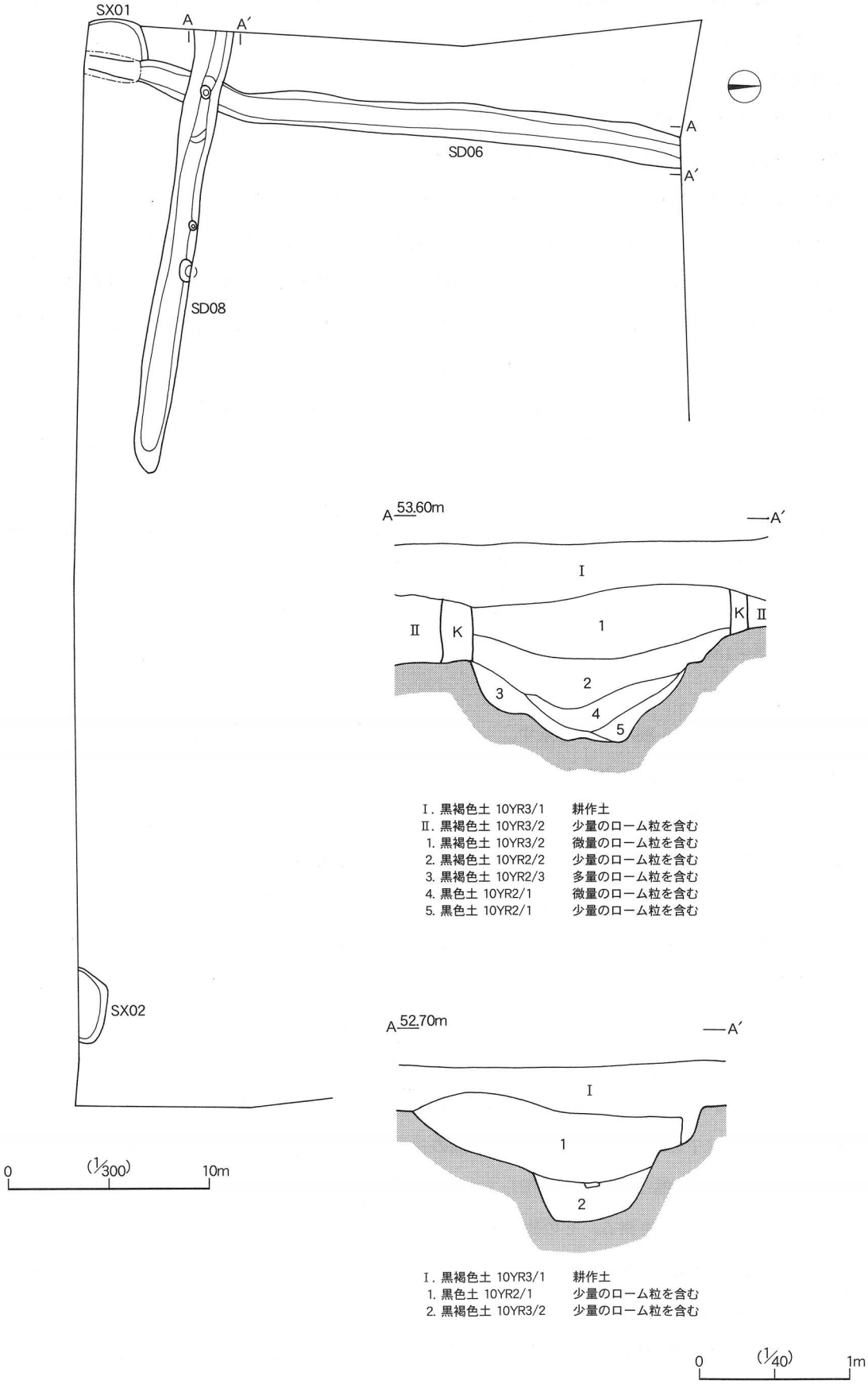


Fig.19　溝状遺構SD06、08実測図

9.66cm、厚さ1.70cm、重さ261gを測る。器厚が薄くなる「海」の部分で折損している。扁平の円形素材石を研磨し、その中央付近に硯面を作出する。現存長8.47cm、幅4.93cmの長方硯面を掘削し、周縁平坦面に先端の細い刀子状工具により鱗状の青海波紋を充填させる。硯面の陸部は丁寧に研磨されている。この海部が折損したため、裏面（硯陰）の中央部にやや小さな硯部を作出する。長さ6.85cm、幅4.60cmの長方形に刻み、「海」部長さ1.40cm、深さ0.71cm。「陸」部長さ5.45cm、深さ0.07cmと非常に浅い。やはり丁寧に使用している。なお、溝中央西側からモロコシ（トウキビ）と思われる径5cm前後の炭化物の塊りが出土している。ちょうどおむすび状を呈していた。

所見　瀬戸美濃系陶器を主体にまとまりある遺物が検出されている。平碗および茶壷は古瀬戸後期に比定され15世紀代。志戸呂系擂鉢も古瀬戸後期に併行されており、15世紀前後に使用していたものと推定される。

溝状遺構ＳＤ09（Fig.20・25）

位置　調査Ｂ区のほぼ中央で、西端部の北側から南側へ直線的に下り、ここから直角に東側に屈曲し、東西方向に走る。北端と東端はいずれも未調査区域に延びている。標高は49.63～50.07mで、北側が高く、東側が低く、その比高差は７cmを測り、上層の確認面の比高差は44cmある。

規模・構造　確認されている長さは延長31.20mで、幅100～165cm、深さ36～70cmで、逆台形に掘り込まれている。

主軸方位　主軸方位は南北軸がＮ－４°－Ｅ。東西軸はＮ－77°－Ｅを示す。

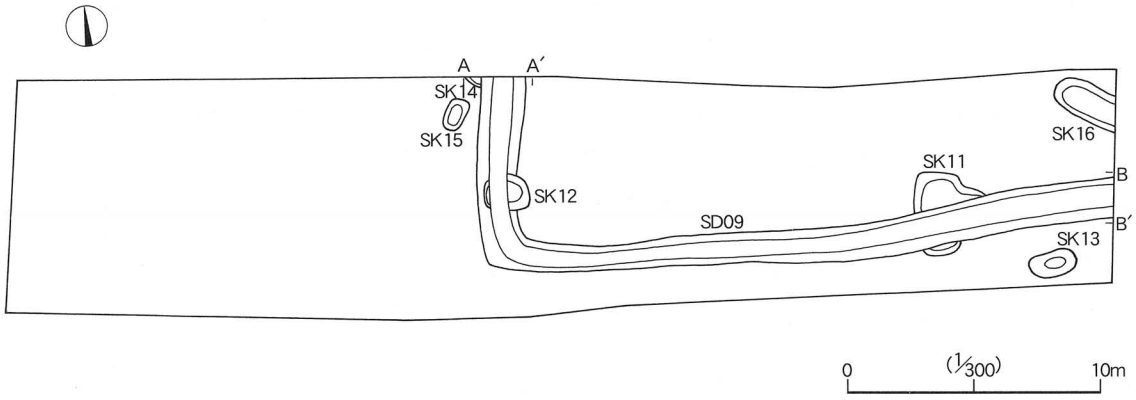
壁　外傾しながら直線的に立ち上がる。

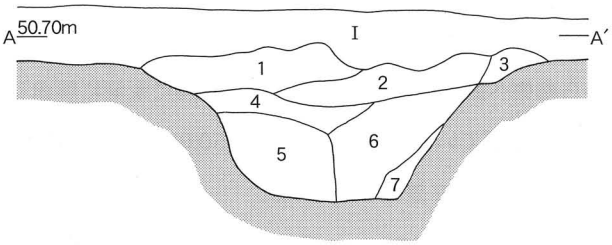
底面　平坦で、明確な硬化面は確認できなかった。

覆土　６層確認されている。上層の２層褐色土は多量のローム粒を含み、１層黄褐色土は多量のローム粒・ロームブロックを含む。中層の３層暗褐色土は少量のローム粒を含み、４層黄褐色土は多量のローム粒を含む。下層の５・６は黄褐色土で、多量のローム粒を含み、いずれも自然堆積層である。

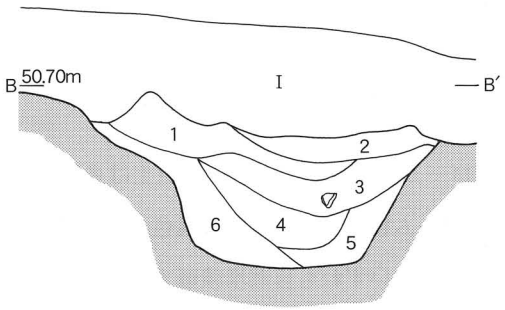
遺物　（Fig.25）覆土中より比較的まとまりある遺物が出土している。とくに土師質土器の内耳土鍋は小破片が多いがまとまっている。また銭貨が２枚出土している。図示したのは内耳土鍋のうち耳部が遺存している５点と底部破片２点である。成形や胎土がそれぞれ酷似していることからほぼ同時期の製作と推定される。その他銭貨が２枚出土している。いずれも中国銭である。11は唐銭「開元通寶（南唐、960年）」である。長さ2.49cm、厚さ0.15cm、重さ2.30gを測る。12も銅銭であるが、４片に割れ、判読不明である。長さ2.48cm、厚さ0.13cm、重さ1.64gを測る。なお、西側溝の南側で土坑ＳＫ12に接する地点で、馬と思われる骨が出土している。粉末化し同定鑑定は不可能であるが、調査時の見解で馬と判断した。

所見　内耳土鍋が比較的多く出土し、併せて中国銭である「開元通寶」が検出されていることから、15世紀前後に使用していたものと推定される。





Ⅰ. 褐灰色土 10YR4/1　耕作土
1. 灰黄褐色土 10YR4/2　微量のローム粒を含む
2. 褐色土 10YR4/4　少量のローム粒を含む
3. 褐色土 10YR4/6　少量のローム粒、ロームブロックを含む
4. 暗褐色土 10YR3/3　少量のローム粒を含む
5. 暗褐色土 10YR3/4　少量のローム粒を含む
6. 暗褐色土 10YR4/4　多量のローム粒を含む
7. 黄褐色土 10YR5/6　多量のローム粒を含む



Ⅰ. 灰黄褐色土 10YR4/2　耕作土
1. 黄褐色土 10YR5/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む
2. 褐色土 10YR4/4　多量のローム粒を含む
3. 暗褐色土 10YR3/4　少量のローム粒を含む
4. 黄褐色土 10YR5/6　多量のローム粒を含む
5. 黄褐色土 10YR5/8　多量のローム粒を含む
6. 黄褐色土 10YR5/8　多量のローム粒、ロームブロックを含む

0　(1/40)　1m

Fig.20　溝状遺構SD09実測図

3．土坑

土坑ＳＫ11（Fig.151）

位置　調査区Ｂ区。標高49.89～50.08mに位置する。

規模・構造　長軸3.05m、短軸1.90mで、平面形態は長方形を呈する。

断面形　箱形

主軸方位　主軸はＮ－９°－Ｗを示す。

壁　確認面からの深さは44cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

底面　平坦で、直床である。

覆土　２層に分層できる。覆土の上層を覆っているのが、１層暗褐色土で、多量のローム粒・ロームブロックを含み、底面に接し覆土の大半を覆っている２層褐色土は多量のローム粒・ロームブロックを含む。

遺物　遺物の出土はない。

所見　時期を決定付ける遺物の出土はないが、覆土の状況からみて中世15世紀前後と推定される。

土坑ＳＫ12（Fig.21）

位置　調査区Ｂ区。標高49.90～50.03mに位置する。溝状遺構ＳＤ09によって切られている。

規模・構造　長軸1.55m、短軸1.30mで、平面形態は隅丸長方形を呈する。

断面形　箱形

主軸方位　主軸はＮ－73°－Ｅを示す。

壁　確認面からの深さは50cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

底面　平坦で、直床である。

覆土　大半が溝状遺構ＳＤ09によって切られ、土層確認が困難であった。

遺物　遺物の出土はない。

所見　時期を決定付ける遺物の出土はないが、覆土の状況からみて中世15世紀前後と推定される。

土坑ＳＫ13（Fig.21・25）

位置　調査区Ｂ区。標高49.56～49.60mに位置する。

規模・構造　長径2.00m、短径1.41mで、平面形態は楕円形を呈する。

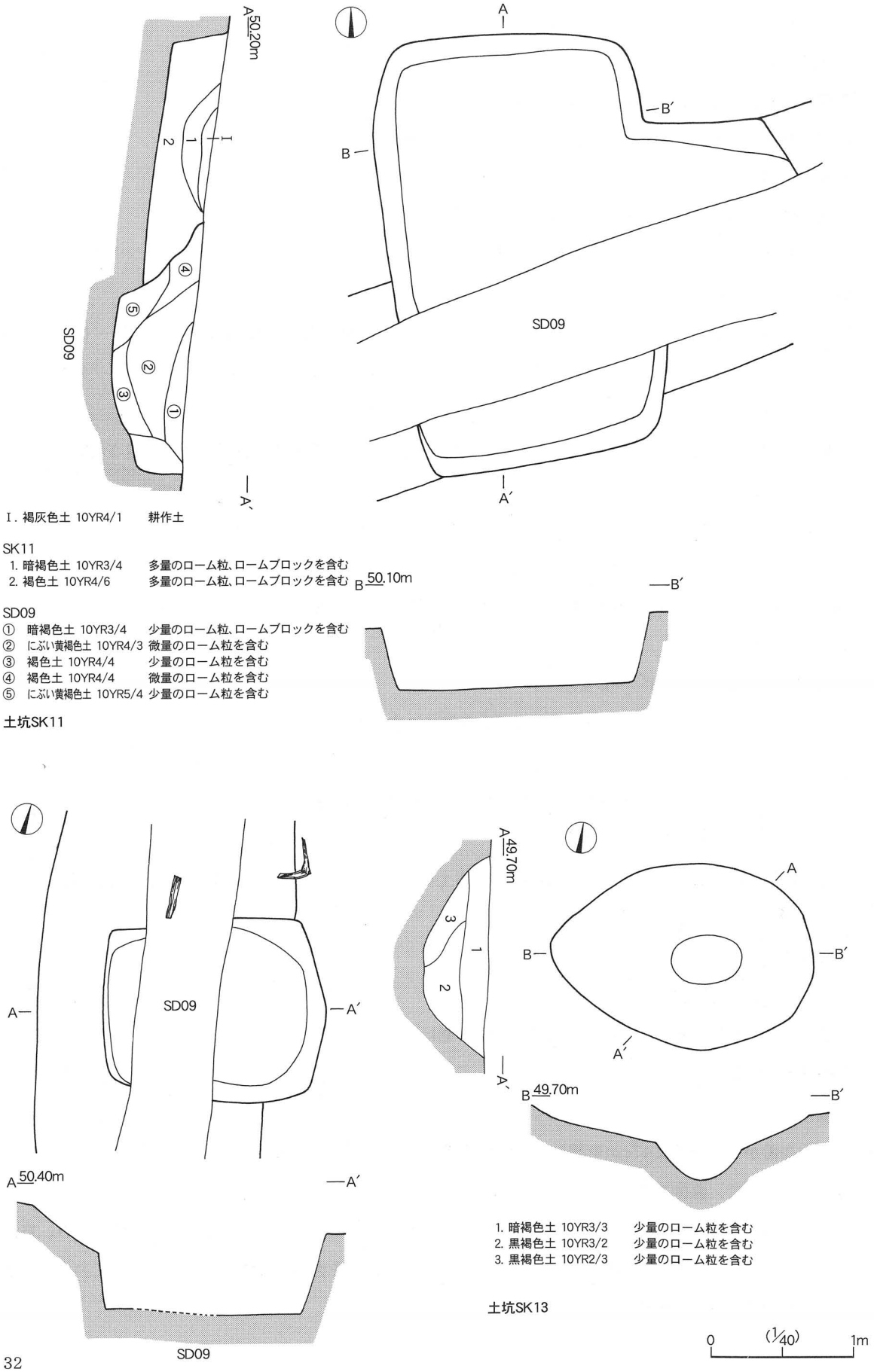
断面形　半円形

主軸方位　主軸はＮ－80°－Ｅを示す。

壁　確認面からの深さは47cmを測り、外傾して開く。

底面　鍋底状で、直床である。

覆土　３層に分層できる。覆土の上層を覆っているのが、１層暗褐色土で、少量のローム粒を含み、底面に接し覆土の大半を覆っている２層黒褐色土は少量のローム粒を含み、壁際から底面に接している３層黒褐色土も少量のローム粒を含む。



Ⅰ. 褐灰色土 10YR4/1　耕作土

SK11
1. 暗褐色土 10YR3/4　多量のローム粒、ロームブロックを含む
2. 褐色土 10YR4/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む

SD09
① 暗褐色土 10YR3/4　少量のローム粒、ロームブロックを含む
② にぶい黄褐色土 10YR4/3 微量のローム粒を含む
③ 褐色土 10YR4/4　少量のローム粒を含む
④ 褐色土 10YR4/4　微量のローム粒を含む
⑤ にぶい黄褐色土 10YR5/4 少量のローム粒を含む

土坑SK11

1. 暗褐色土 10YR3/3　少量のローム粒を含む
2. 黒褐色土 10YR3/2　少量のローム粒を含む
3. 黒褐色土 10YR2/3　少量のローム粒を含む

土坑SK13

Fig.21　土坑SK11、12、13実測図

遺物　遺物の出土はない。

所見　時期を決定付ける遺物の出土はないが、覆土の状況からみて中世15世紀前後と推定される。

土坑ＳＫ14（Fig.22）

位置　調査区Ｂ区。標高50.57mに位置する。北側の大半が未調査区域に広がっている。

規模・構造　確認できる長軸0.50m、短軸0.28mで、平面形態は長方形を呈するものと推定できる。

断面形　箱形

主軸方位　主軸はＮ－73°－Ｗを示す。

壁　確認面からの深さは49cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

底面　平坦で、直床である。

覆土　２層に分層できる。覆土の上層を覆っているのが、１層にぶい黄褐色土で、多量のローム粒を含み、底面に接している２層褐色土は多量のローム粒を含む。

遺物　遺物の出土はない。

所見　時期を決定付ける遺物の出土はないが、覆土の状況からみて中世15世紀前後と推定される。

土坑ＳＫ15（Fig.22）

位置　調査区Ｂ区。標高50.35～50.54mに位置する。

規模・構造　長軸1.18m、短軸0.84mで、平面形態は隅丸方形を呈する。

断面形　逆台形

主軸方位　主軸はＮ－80°－Ｅを示す。

壁　確認面からの深さは50cmを測り、外傾して立ち上がる。

底面　平坦で、直床である。

遺物　遺物の出土はない。

所見　時期を決定付ける遺物の出土はないが、覆土の状況からみて中世15世紀前後と推定される。

土坑ＳＫ16（Fig.22）

位置　調査区Ｂ区。標高50.20～50.40mに位置する。

規模・構造　長軸2.54m、短軸1.29mで、平面形態は長方形を呈する。

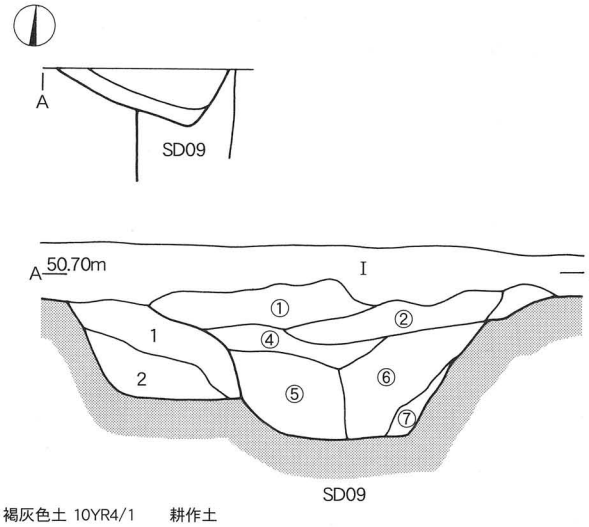
断面形　箱形

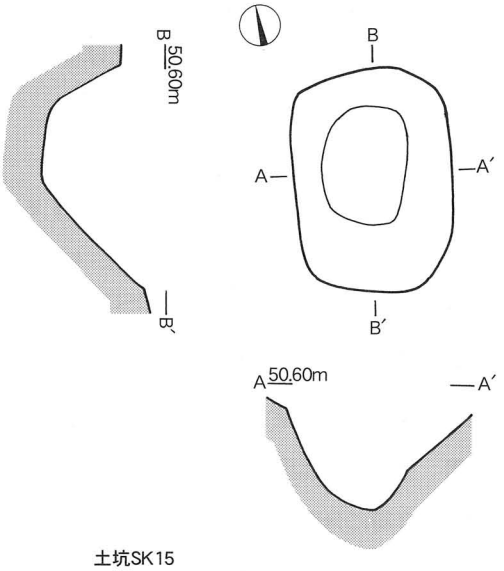
主軸方位　主軸はＮ－77°－Ｗを示す。

壁　確認面からの深さは42cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

底面　平坦で、直床である。

覆土　3層に分層できる。覆土の上層を覆っているのが、2層褐色土で、多量のローム粒・ロームブロックを含み、底面に接し覆土の大半を覆っている1層褐色土も多量のローム粒・ロームブロックを含み、同





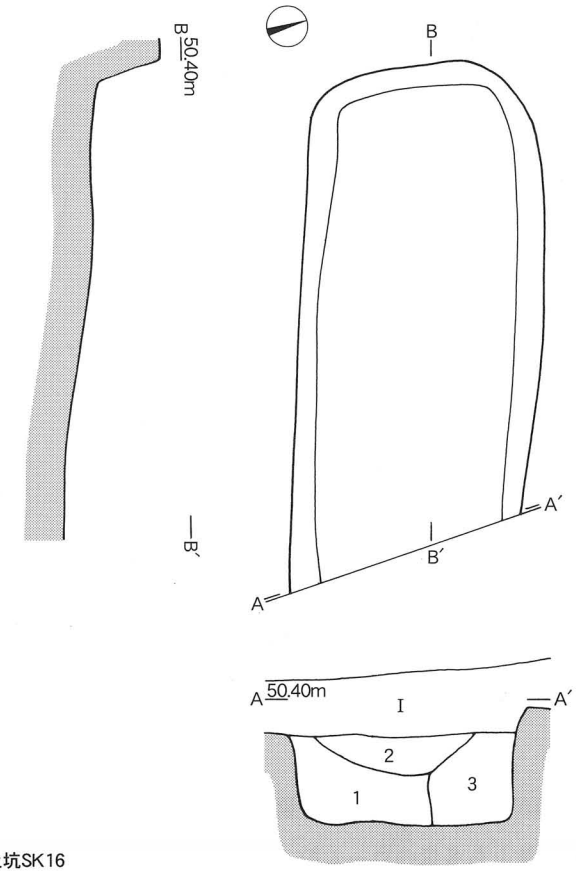
Ⅰ. 褐灰色土 10YR4/1　耕作土

SK14
① にぶい黄褐色土 10YR5/4 多量のローム粒を含む
② 褐色土 10YR4/4　多量のローム粒を含む

SD09
① 灰黄褐色土 10YR4/2 微量のローム粒を含む
② 褐色土 10YR4/4　少量のローム粒を含む
③ 褐色土 10YR4/6　少量のローム粒、ロームブロックを含む
④ 暗褐色土 10YR3/3　少量のローム粒を含む
⑤ 暗褐色土 10YR3/4　少量のローム粒を含む
⑥ 暗褐色土 10YR4/4　多量のローム粒を含む
⑦ 黄褐色土 10YR5/6　多量のローム粒を含む

土坑SK14

土坑SK15



Ⅰ. 褐灰色土 10YR4/1　耕作土
1. 黄褐色土 10YR5/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む
2. 褐色土 10YR4/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む
3. 褐色土 10YR4/4　多量のローム粒、ロームブロックを含む

0　(1/40)　1m

土坑SK16

Fig.22　土坑SK14、15、16実測図

じく底面に接している３層黄褐色土も多量のローム粒・ロームブロックを含む。

遺物　遺物の出土はない。

所見　時期を決定付ける遺物の出土はないが、覆土の状況からみて中世15世紀前後と推定される。

４．竪穴状遺構（Fig.23・24）

竪穴状遺構ＳＸ01（Fig.23・24）

位置　調査区Ａ区南西側。標高52.02mに位置する。

規模・構造　東側は溝ＳＤ06によって切られ、南側は未調査区域に広がる。したがって現存長軸3.02m、短軸1.40mで、平面形態は隅丸方形を呈するものと推定する。

主軸方位　長軸を主軸とするとＮ－３°－Eを示す。

壁　確認面からの深さは45cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

床　ほぼ平坦で、直床である。

付帯施設　特に無し。

覆土　２層が確認された。いずれも自然堆積土層である。上層である１層黒褐色土は微量のローム粒を含む。床面に接する２層黒褐色土は少量のローム粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。

遺物　覆土中より瀬戸美濃の深皿類が１点出土している。底部破片であるが、底径15cmを測る。

所見　隅丸方形を呈する竪穴状遺構で、半分以上は撹乱を受けているが、覆土中の出土遺物から判断して、古瀬戸後期で15世紀と推定される。

竪穴状遺構ＳＸ02（Fig.23）

位置　調査区Ａ区の南東側。標高51.86mに位置する。

規模・構造　南側半分以上は未調査区域に広がる。したがって確認できる現存長軸3.70m、短軸1.30mで、平面形態は隅丸方形を呈するものと推定する。

主軸方位　長軸を主軸とするとＮ－75°－Eを示す。

壁　確認面からの深さは47cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

床　ほぼ平坦で、直床である。

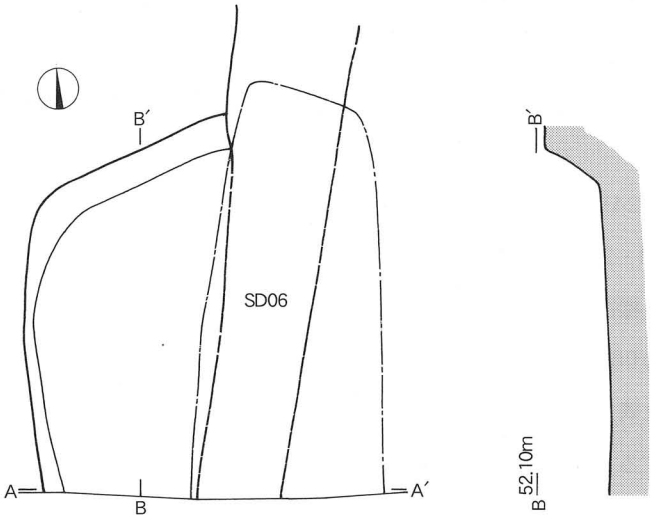
付帯施設　特に無し。

覆土　3層が確認されているが、1層は耕作土層で、２・３層が覆土である。いずれも自然堆積土層で、上層である２層黄褐色土は多量のローム粒を含む。床面に接する３層褐色土は少量のローム粒・ロームブロックを含む。しまりに欠ける。

遺物　検出できなかった。

所見　隅丸方形を呈する竪穴状遺構で、半分以上は撹乱を受けているが、覆土の状態から判断して、中世と推定される。

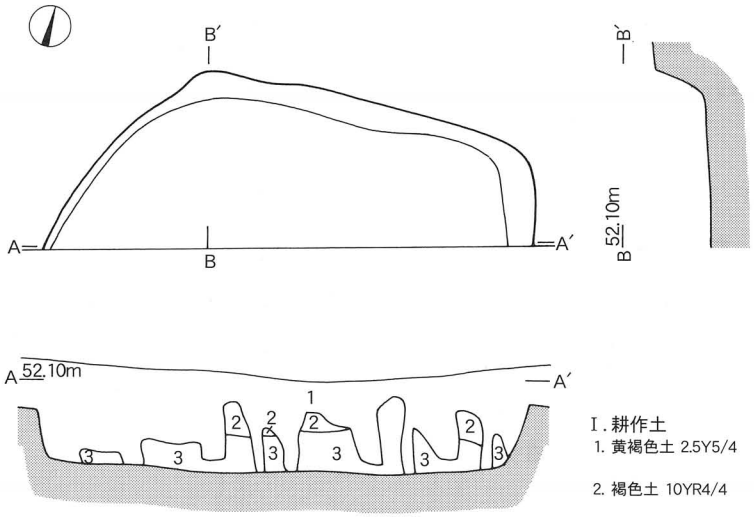
（小川　和博）



SX02
1. 黒褐色土 10YR3/1　多量のローム粒、ロームブロックを含む

SD06
① 黒色土 10YR2/1　少量のローム粒、ロームブロックを含む

竪穴状遺構SX01



Ⅰ. 耕作土
1. 黄褐色土 2.5Y5/4　多量のローム粒、微量の炭化物、多量のロームブロックを含みしまりに欠ける
2. 褐色土 10YR4/4　少量のローム粒、微量の炭化物、少量のロームブロックを含みしまりに欠ける

竪穴状遺構SX02

0　(1/60)　2m

Fig.23　竪穴状遺構SX01、02実測図

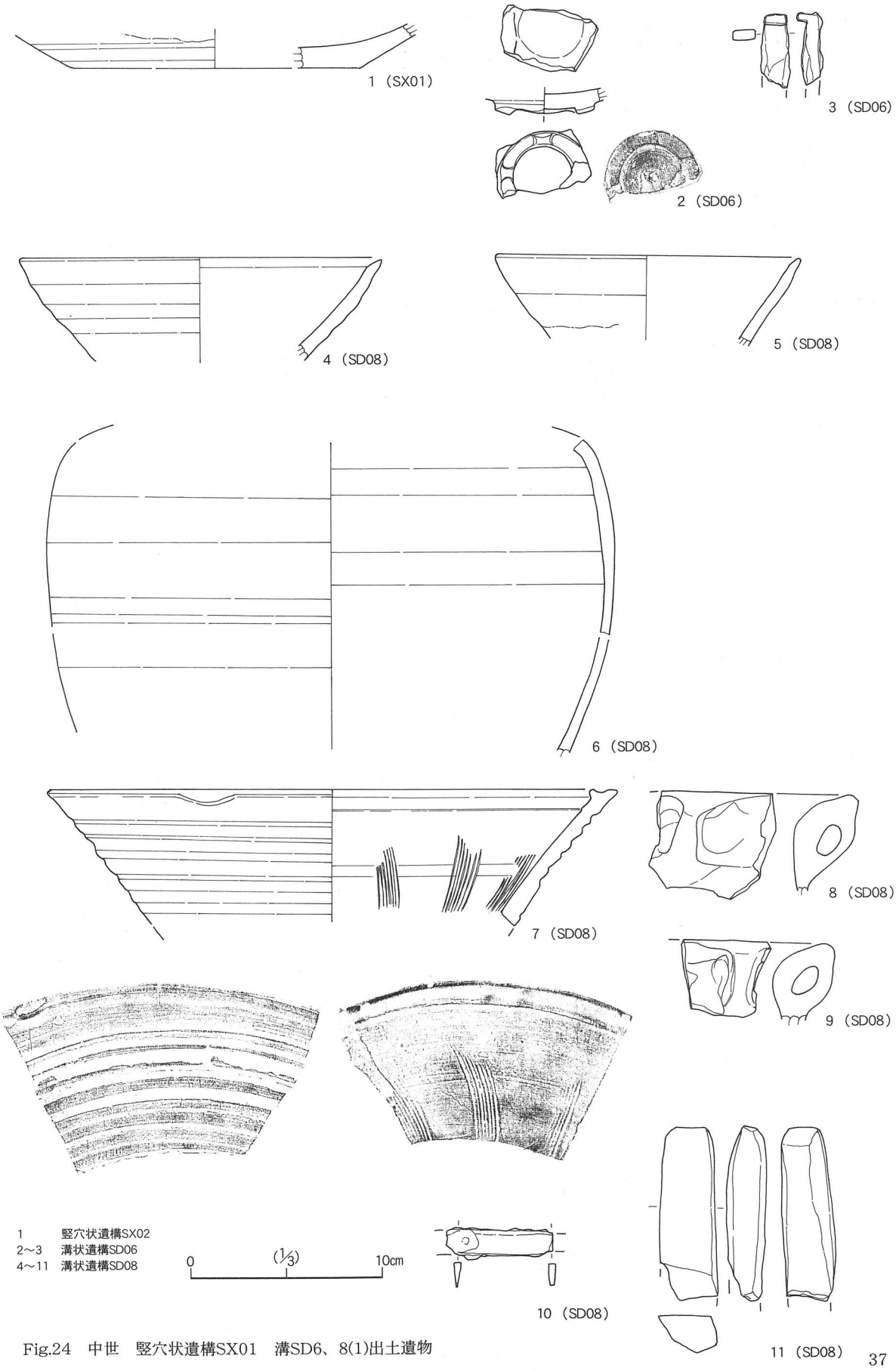


Fig.24　中世　竪穴状遺構SX01　溝SD6、8(1)出土遺物

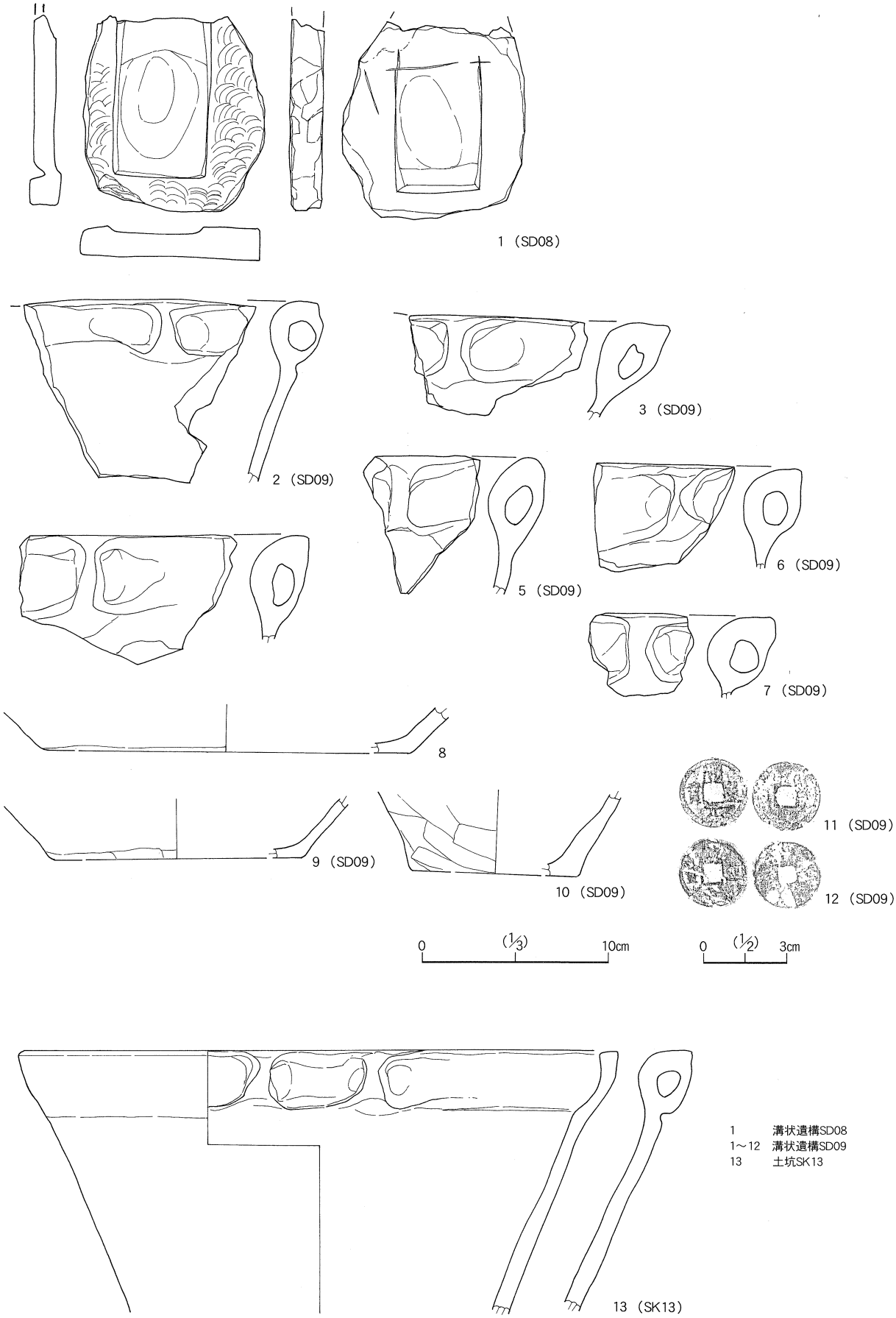


Fig.25　中世　溝SD8(2)、SD9　土坑SK13出土遺物

第Ⅲ章　まとめ

本遺跡の中心は古代および中世であるが、その中に縄文時代、弥生時代が含まれている。縄文時代は中期のみで、全体の遺物量が少ないものの、住居跡と思われる遺構の検出がある。方形を呈し、炉の設置は確認できなかった。ここから深鉢の胴下半部の破片が出土した。明瞭な文様を確認できず、ヘラによる整形痕のみの土器である。僅かに残存する底部には網代痕が認められ、明らかに中期中葉から後半にかけたものであることが判明している。周辺からも小破片であるが阿玉台式、大木８ｂ式、加曽利Ｅ１～３式土器が出土している。これらから判断すると大木８ｂ式古期段階に相当するものと推定される。

弥生時代は土器が僅かに２点のみという微量であり、集落の存在は確認できず、主体となることはなかった。時期は後期中葉と推定される。

古代に相当する奈良・平安時代は、竪穴住居跡４軒が検出された。住居跡群は調査区Ａ区の北側に集中することから本来の集落は未調査区域である北側の台地平坦面にその中心を置くものと推定される。なお、全体的に出土遺物は少なく、なかなか時期決定の判断を困難しているが、時期は概ね８世紀代と９世紀代に分離することが可能である。まず奈良時代である８世紀代は住居跡ＳＩ０２の１軒だけであるが、本跡はカマドを北壁中央に設置し、４本柱構造の住居である。しかもカマド東側に貯蔵穴を有する。また平安時代の９世紀に位置付けられる住居跡は３軒で、後半に位置付けられる。ＳＩ０１・０３・０４でやはりカマドを北壁中央に設置するが、明瞭な主柱穴をもたない住居である。しかもＳＩ１以外には南壁際中央入口部に梯子穴の設置が確認できない。こられ３軒の住居の主軸方位はほぼ同一で、遺物の出土量は極端に少ないが同時期と判断した。

中世の遺構については、溝と土坑が検出された。とくに溝から出土した遺物は断片的なものにも関わらず、その内容は豊富で重要である。溝ＳＤ８からは瀬戸美濃系の平碗、茶壷、志戸呂の擂鉢、内耳土鍋のほか図示していないが常滑も出土していた。なかでも硯は特筆される。これは西側に展開する「宇留野城跡」との密接なかかわりがあることはいうまでもない。当城跡の概要については既に第４節で触れたとおりであるが、中城と外城に挟まれた堀の延長がここ本遺跡の南側にあたり、いわゆる「外堀」の一角に形成されたものである。さらに調査区Ｂ区で検出された溝ＳＤ９は中世における本遺跡の西辺から南辺を明瞭に区画する区画溝であるが、南辺がちょうど外堀に並行して走っている。調査区Ａ区を含めた区画内には明瞭な城跡とのかかわる井戸等の生活関連遺構をはじめとする建物跡等の遺構の検出はなかったが、陶磁器類や内耳土鍋、さらに硯の出土は宇留野城主郭部との直接的で、同時存在した有機的な関係があったことを示唆している。遺構の検出は少なかったが、出土遺物を含め今後の研究の進展によっては、宇留野城跡と本遺跡の関わりと性格がさらに解明されることとなるであろう。

（小川　和博）

1. 出土土器観察表

SI－01（Fig.8）

番号	器種	遺存度	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	土師器 坏	体部1/2欠損	12.2 — 4.8 7.0	平底の底部から体部は外傾して立ち上がり、口縁部端部は僅かに外反する。	ロクロ成形。外面体部下端手持ちヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後、黒色処理	石英・長石粒を含む。 良好	橙色(7.5YR4/6)	内黒 9世紀後半
2	土師器 皿	体部1/2欠損	12.2 — 1.9 4.6	やや上げ底気味の底部から体部は直線的に大きく開く。	ロクロ成形。外面体部下端回転ヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後、黒色処理	石英・長石粒を含む。 良好	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	内黒 9世紀後半
3	土師器 甕	体部1/2欠損	13.4 15.9 17.7 8.4	平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、頸部は緩く屈曲し、口縁部端部は僅かに摘み上げられる。	口縁部ヨコナデ。体部外面縦位のヘラケズリ。下端部横位のヘラケズリ。内面体部横位のヘラナデ。	チャート・石英・スコリア・長石粒を含む。 良好	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	
4	土師器 甕	体部1/2欠損	18.4 22.0 [16.0] —	体部は内湾し、頸部は内傾して立ち上がり、口縁端部は垂直気味に摘み上げられる。	口縁部ヨコナデ。体部外面縦位のヘラケズリ。内面体部横位のヘラナデ。	石英・スコリア・長石粒を含む。 良好	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	
5	土師器 甕	口縁部1/2 残存	15.0 — [4.2] —	平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、頸部は緩く屈曲し、口縁部端部は僅かに摘み上げられる。	口縁部ヨコナデ。体部外面縦位のヘラケズリ。内面体部横位のヘラナデ。	石英・黒色粒子・長石粒を含む。 良好	にぶい橙色 (5YR6/4)	
6	土師器 甕	底部のみ残存	— [6.5] 8.4	平底の底部から体部は外傾して立ち上がる。	体部外面縦位、横位のヘラケズリ。底部ヘラナデ。内面ヘラナデ。底面指ナデ。	石英・スコリア・長石粒を含む。 良好	橙色(7.5YR6/6)	
7	須恵器 甕	胴部破片		胴部破片。	外面タタキ調整。内面ヘラナデ。	石英・長石粒を含む。 良好	褐灰色(10YR4/1)	

SI－02（Fig.10）

番号	器種	遺存度	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	土師器 坏	口縁部5/6 欠損	12.4 — 6.1 4.3	丸底の底部から体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する。	口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石粒を含む。 良好	にぶい黄橙色 (10YR5/4)	8世紀
2	土師器 坏	体部1/6残存	12.4 — 6.1 4.3	丸底の底部から体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する。	口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	石英・長石粒を含む。 良好	灰黄褐色 (10YR4/2)	8世紀
3	土師器 甕	底部残存	— (10.8) 11.2	やや丸底気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。	外面体部および底部ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	石英・スコリア・長石粒を含む。 良好	にぶい黄橙色 (10YR5/3)	
4	土師器 甕	底部残存	— (12.3) 11.0	平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。	外面体部および底部ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	石英・スコリア・長石粒を含む。 良好	にぶい黄橙色 (10YR4/3)	

SI－03（Fig.12）

番号	器種	遺存度	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	土師器 甕	口縁部1/10 残存	19.0 — (6.3) —	体部は内湾し、頸部は内傾して立ち上がり、口縁端部は垂直気味に摘み上げられる。	口縁部ヨコナデ。体部外面縦位のヘラケズリ。内面体部横位のヘラナデ。	雲母・石英・長石粒を含む。 良好	浅黄橙色 (10YR8/3)	

SI－04（Fig.14）

番号	器種	遺存度	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	土師器 坏	体部1/3残存	16.0 — 4.6 9.6	やや上げ底気味の底部から体部下端は面取りされ、体部は直線的に外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。体部外面ロクロナデ。下端回転ヘラケズリ。底部回転ヘラナデ。内面ヘラミガキの後、黒色処理。	石英・スコリア・長石粒を含む。 良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	9世紀後半
2	須恵器 坏	完存品	13.6 — 4.0 6.5	平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部端で僅かに外反する。	ロクロ成形。体部内外面ロクロナデ。底部ヘラナデ。ヘラ書。	石英・スコリア・長石粒を含む。 良好	灰オリーブ色 (5YR5/2)	9世紀後半

SD01、03・SK07(Fig.18)

出土	図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
ＳＤ１	土師器 坏	須恵器 高台付坏	— (5.0) 10.0	「ハ」の字状の高台に坏底部は屈曲して開き、体部は外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。高台貼付けで、高台部周縁ナデ。	石英・黒色粒子・長石粒を含む。 良好	暗灰黄色 (2.5YR5/2)	体部1/4残存 ９世紀前半
ＳＤ３	土師器 坏	須恵器 坏	12.0 — 3.4 8.0	口径に対し器高が低い坏で、平底の底部から体部は直線的に外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。	白色針状鉱物・石英・長石粒を含む。 良好	灰色 (N6/)	体部1/4残存 ８世紀
ＳＤ３	土師器 甕	土師器 坏	14.2 — 4.7 6.5	碗形を呈し、平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。	口縁部ヨコナデ。体部外面横位のヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内面体部ヘラナデ。	石英・黒色粒子・長石粒を含む。 良好	浅黄橙色 (10YR8/3)	体部1/4残存 ８世紀
ＳＤ３	土師器 甕	須恵器 甕		胴部破片。	外面タタキ調整。内面ヘラナデ。	石英・黒色粒子・長石粒を含む。 良好	灰色 (5YR5/1)	内外面自然釉が掛かっている。
ＳＫ７		土師器 甕	13.0 — (8.2) —	体部は内湾気味に立ち上がり、頸部は緩く屈曲し、口縁端部は垂直気味に摘み上げられる。	口縁部ヨコナデ。体部外面縦位のヘラケズリ。内面体部横位のヘラナデ。	石英・長石粒を含む。 良好	褐灰色 (10YR4/3)	口縁部1/10残存

中世SX01・SD06、08(Fig.24・25)

出土	図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
ＳＸ１	Fig.24-1	瀬戸美濃 深皿	— (1.7) 15.0	平底の底部から体部は大きく外傾して開く。	ロクロ挽き整形。内外面ナデ。	緻密、浅黄。 石英・長石粒を含む	浅黄色 (5Y7/4)	古瀬戸後期。 15世紀。 内面に灰釉斑状に付着 底部1/6残存
ＳＤ６	Fig.24-2	白磁 皿	— (1.2) 4.8	削り出し高台をもつ。	ロクロ挽き整形。	緻密、灰白。	灰白色 (5Y8/2)	Ｂ群、15世紀代 底部のみ残存
ＳＤ８	Fig.24-4	瀬戸美濃 平碗	19.0 — (5.3) —	体部は内湾気味に立ち上がる。	ロクロ挽き整形。内外面に灰釉が掛かる。	緻密、灰色	オリーブ黄色 (7.5Y6/3)	古瀬戸後期。 15世紀。 口縁部1/5残存
ＳＤ８	Fig.24-5	瀬戸美濃 平碗	19.0 — (5.3) —	体部はほぼ直線的に立ち上がる。	ロクロ挽き整形。内外面に灰釉が掛かる。	緻密、灰色	オリーブ黄色 (7.5Y6/3)	古瀬戸後期。 15世紀。 口縁部1/5残存
ＳＤ８	Fig.24-6	瀬戸美濃 茶壷	— 29.80 (5.3) —	体部は内湾して立ち上がり、肩部でやや張る。	ロクロ挽き整形。外面に鉄釉が掛かる。	緻密、灰オリーブ。 石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	古瀬戸後期。 15世紀。 体部1/4残存
ＳＤ８	Fig.24-7	志戸呂 擂鉢	30.0 — (7.0) —	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口唇部で内側に稜をもつ。	ロクロ挽き整形。内外面に鉄釉が掛かる。内壁面に７本単位の櫛目を縦位に間隔をあけ施文する。	緻密、にぶい黄橙色 石英・長石粒を含む	褐色 (7.5YR4/3)	古瀬戸後期。 15世紀。 口縁部1/6残存
ＳＤ８	Fig.24-8	土師質土器 内耳土鍋		耳部貼付け部外面は突出し、体部内湾気味に立ち上がる。	内外面口縁部横位のヘラナデ。	白色針状鉱物・石英・長石粒を含む。 良好	黒褐色(10YR3/1) 黄橙色(7.5YR8/8)	15世紀 口縁部破片
ＳＤ８	Fig.24-9	土師質土器 内耳土鍋		耳部貼付け部外面は突出し、体部内湾気味に立ち上がる。	内外面口縁部横位のヘラナデ。	石英・長石粒を含む。 良好	浅黄色(2.5YR8/4)	15世紀 口縁部破片
ＳＤ９	Fig.25-2	土師質土器 内耳土鍋		耳部貼付け部外面は突出し、体部内湾気味に立ち上がる。	内外面口縁部横位のヘラナデ。体部縦位のヘラナデ。	雲母・石英・長石粒を含む。 良好	黒褐色(10YR3/1) にぶい橙色(7.5YR6/4)	15世紀 口縁部破片 外面にスス付着
ＳＤ９	Fig.25-3	土師質土器 内耳土鍋		耳部貼付け部外面は突出し、体部内湾気味に立ち上がる。	内外面口縁部横位のヘラナデ。	石英・長石粒を含む。 良好	黒褐色(10YR3/1) にぶい褐色(7.5YR5/3)	15世紀 口縁部破片 外面にスス付着
ＳＤ９	Fig.25-4	土師質土器 内耳土鍋		耳部貼付け部外面は突出し、体部内湾気味に立ち上がる。	内外面口縁部横位のヘラナデ。体部縦位のヘラナデ。	石英・黒色粒子・長石粒を含む。良好	黒褐色(10YR3/1) 明赤褐色(5YR3/2)	15世紀 口縁部破片 外面にスス付着

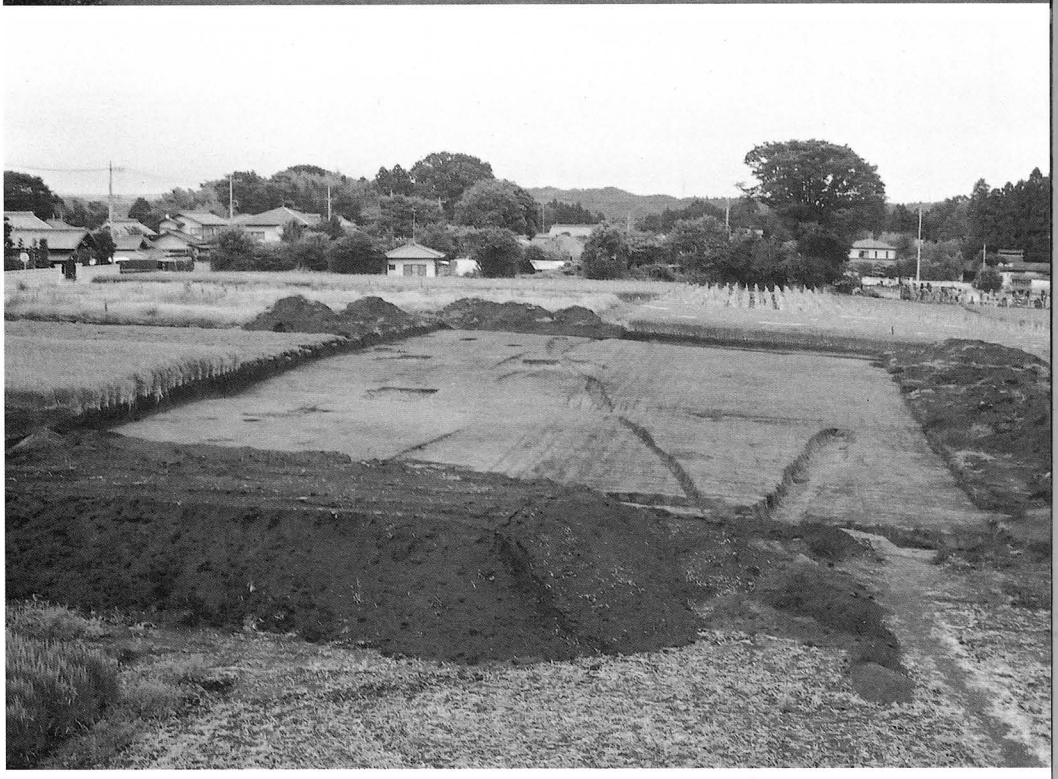
中世SD08(1)、09・SK13(Fig.25)

番号	図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考
ＳＤ９	Fig.25-5	土師質土器 内耳土鍋		耳部貼付け部外面は突出し、体部内湾気味に立ち上がる。	内外面口縁部横位のヘラナデ。	石英・黒色粒子・長石粒を含む。 良好	にぶい褐色 (7.5YR5/4) 橙色(7.5YR5/4)	15世紀 口縁部破片 外面にスス付着
ＳＤ９	Fig.25-6	土師質土器 内耳土鍋		耳部貼付け部外面は突出し、体部内湾気味に立ち上がる。	内外面ヨコナデ。	石英・長石粒を含む。 良好	黒褐色(10YR3/1) 明赤褐色(5YR5/8)	15世紀 口縁部破片
ＳＤ９	Fig.25-7	土師質土器 内耳土鍋		耳部貼付け部外面は突出し、体部内湾気味に立ち上がる。	内外面ヨコナデ。	石英・長石粒を含む。 良好	にぶい赤褐色 (5YR4/3)	15世紀 口縁部破片
ＳＤ９	Fig.25-8	土師質土器 土鍋	— — (2.5) 20.0	平底の底部から体部は外傾して立ち上がる。	外面体部ヘラナデ。底部ヘラナデ。内面ナデ。	石英・長石粒を含む。 良好	黒褐色(10YR3/2) 灰白色(7.5YR8/2)	15世紀 底部破片 外面にスス付着
ＳＤ９	Fig.25-9	土師質土器 内耳土鍋	— — (3.2) 14.0	平底の底部から体部は外傾して立ち上がる。	外面体部ヘラナデ。底部ヘラナデ。内面ナデ。	雲母・石英・長石粒を含む。 良好	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	15世紀 底部破片
ＳＤ９	Fig.25-10	土師質土器 甕	— — (4.5) 9.0	平底の底部から体部は外傾して立ち上がる。	外面体部ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	石英・長石粒を含む。 良好	にぶい赤褐色 (5YR4/3)	底部破片
ＳＤ９	Fig.25-13	土師質土器 内耳土鍋	32.0 — (13.8) —	耳部貼付け部外面は突出し、体部内湾気味に立ち上がる。	内外面ヨコナデ。	白色針状鉱物・石英・長石粒を含む。 良好	黒褐色(10YR3/1) 橙色(7.5YR/6)	5世紀 口縁部破片

法量は上から口径・胴径（最大径）・器高・底径、（　　）は残存高を示す。

写真図版

遠景



A区全景

A区全景

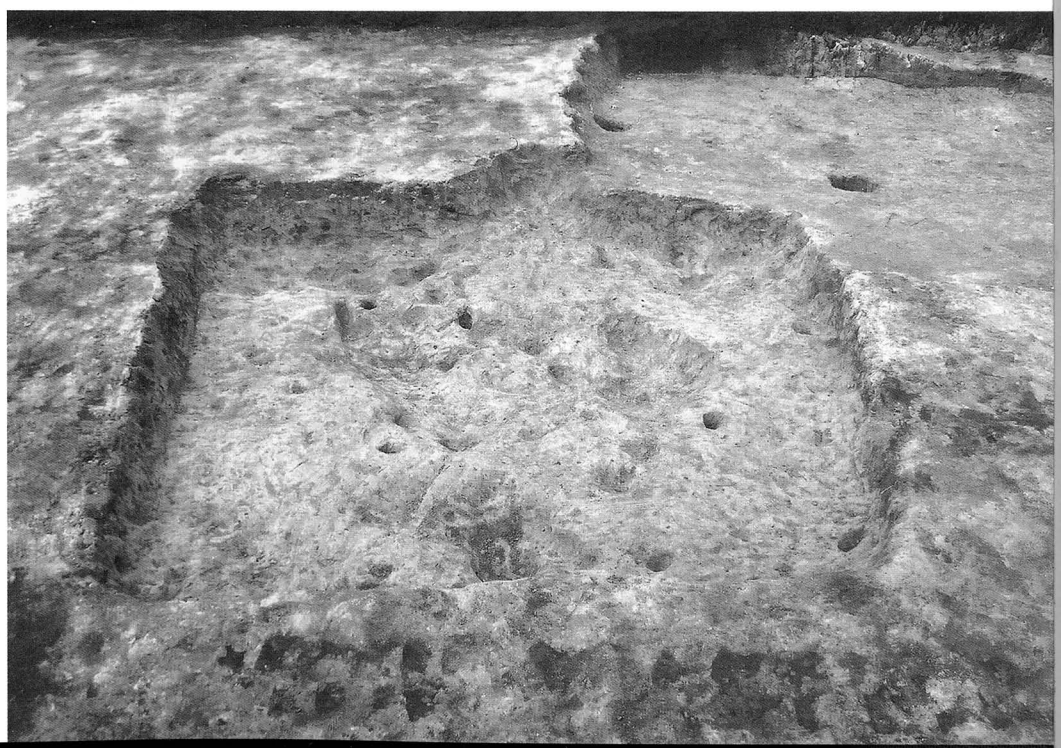
B区全景

竪穴住居跡SI05

竪穴住居跡SI05

竪穴住居跡SI01

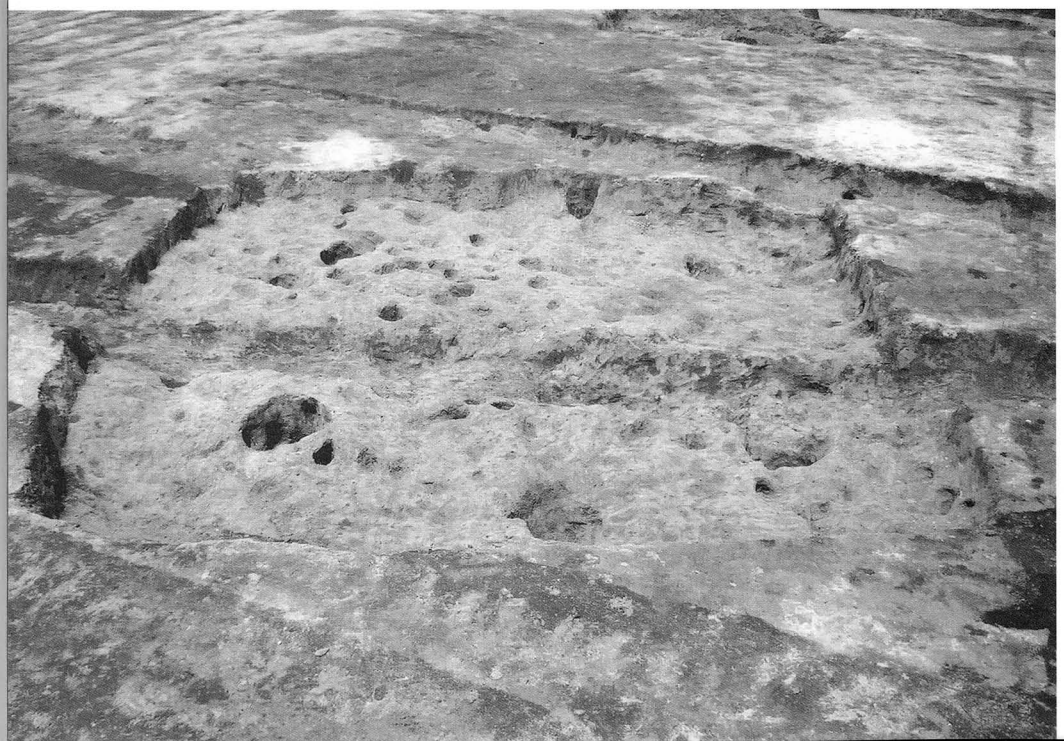
竪穴住居跡SI01　カマド



竪穴住居跡SI01　掘形

竪穴住居跡SI02

竪穴住居跡SI02　カマド



竪穴住居跡SI02　掘形

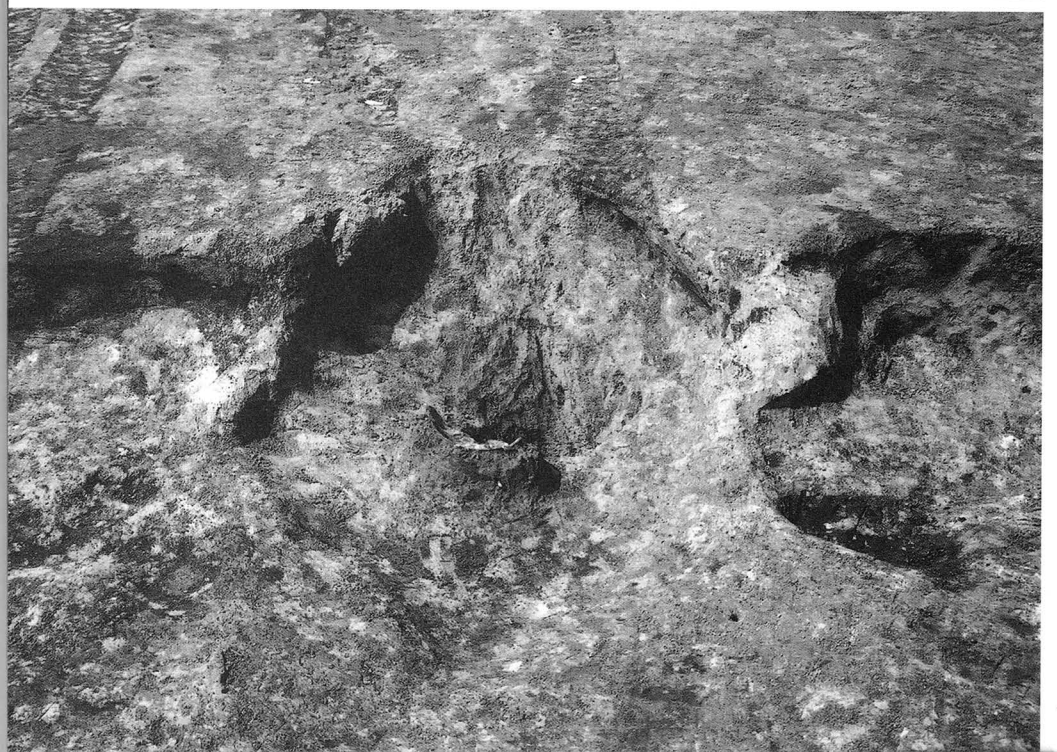
竪穴住居跡SI03

竪穴住居跡SI03　カマド

竪穴住居跡SI03　掘形

竪穴住居跡SI04

竪穴住居跡SI04



竪穴住居跡SI04　カマド

溝状遺構SD03

溝状遺構SD03

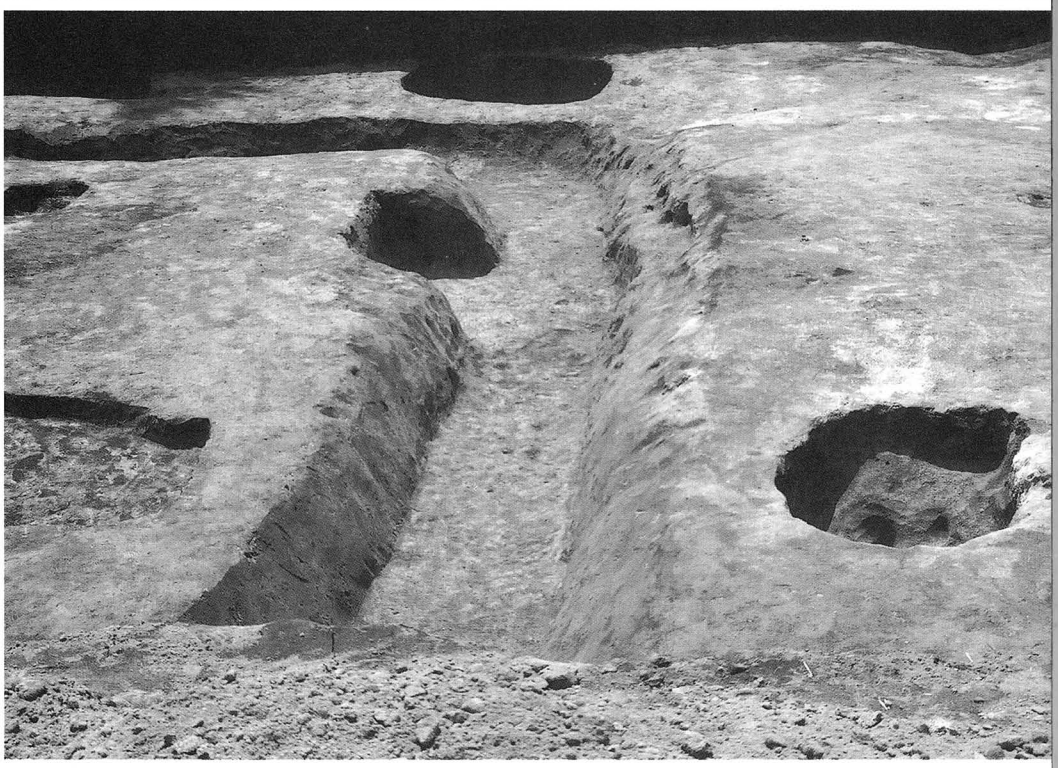
土坑SK05

竪穴状遺構SX01
溝状遺構SD06

溝状遺構SD08

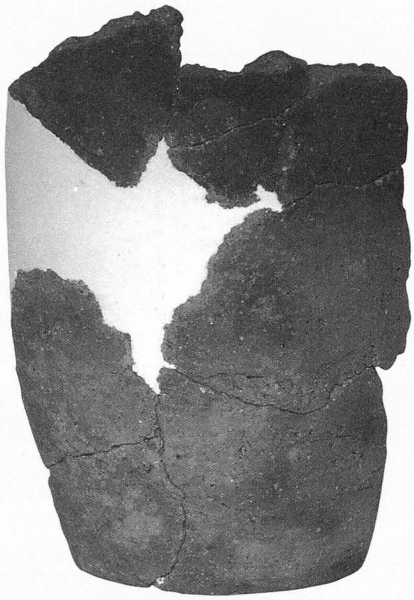
溝状遺構SD08
硯出土状況

溝状遺構SD09

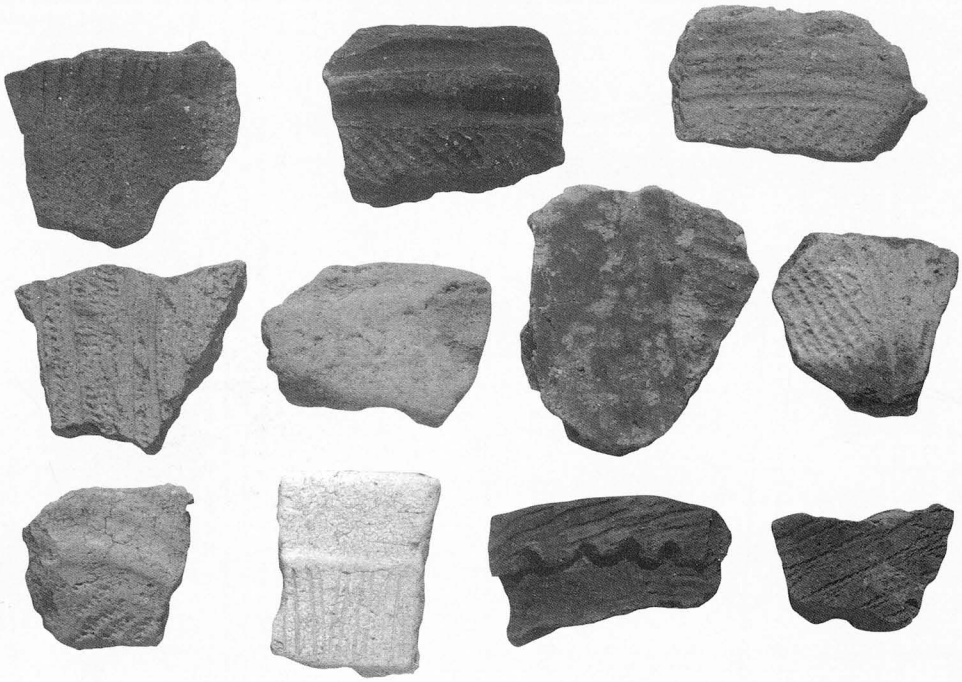


溝状遺構SD09

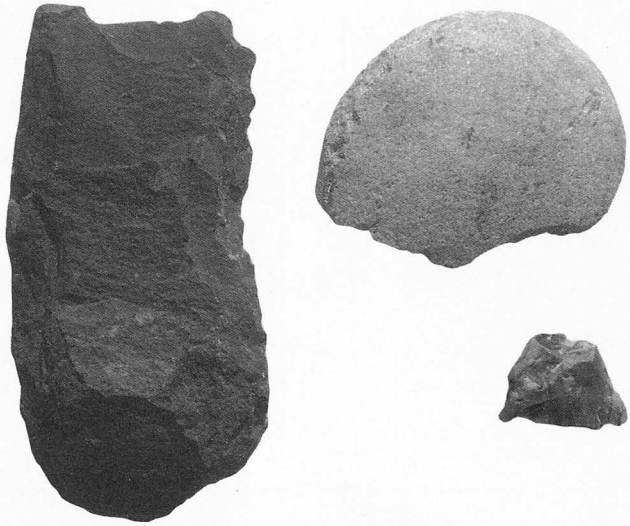
溝状遺構SD09
獣骨出土状況



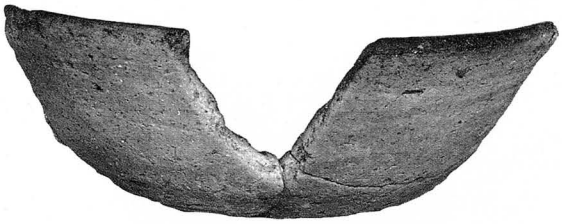
1　住居跡SI05出土遺物



2　遺構外出土縄文土器



3　遺構外出土石器

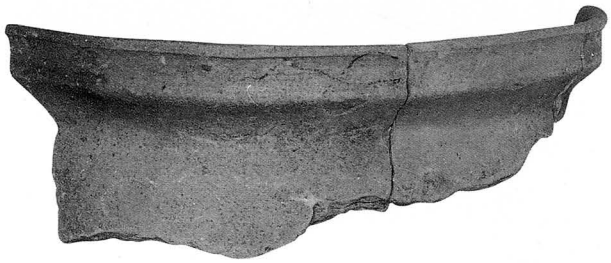


1

2

3

4

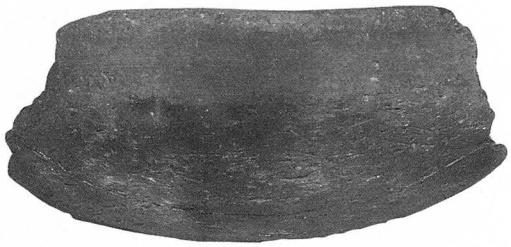


5

6

7

住居跡SI05出土遺物
1～7　SI01

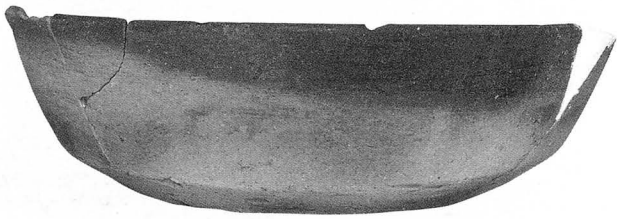


1

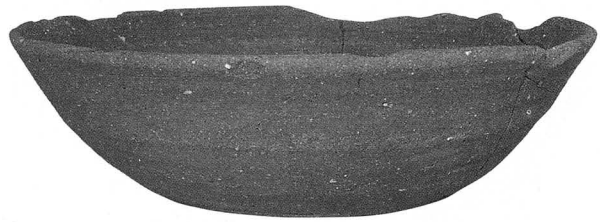
2

3

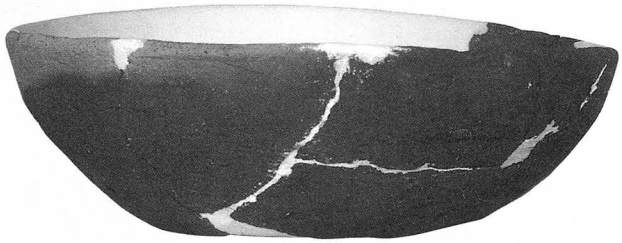
4



5



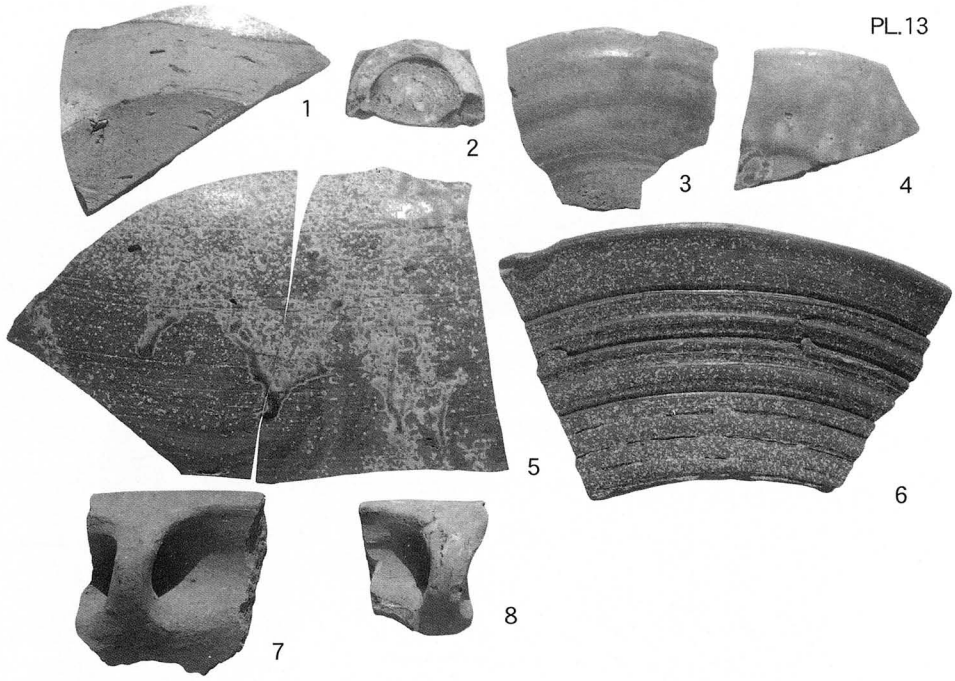
6



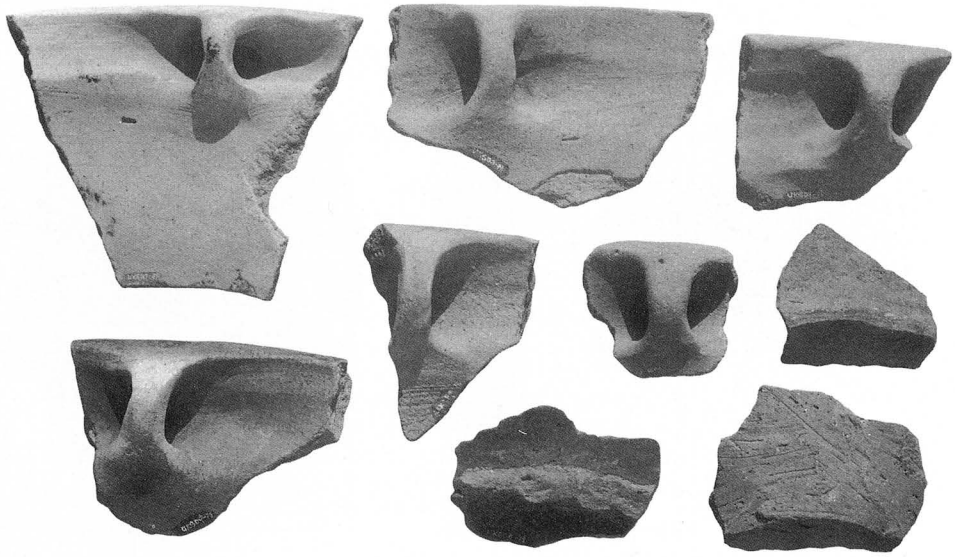
7

住居跡、溝、土坑出土遺物
1～4　住居跡SI02
5・6　住居跡SI04
7・11・12　溝SD3
8・9　溝SD01
10　土坑SK07

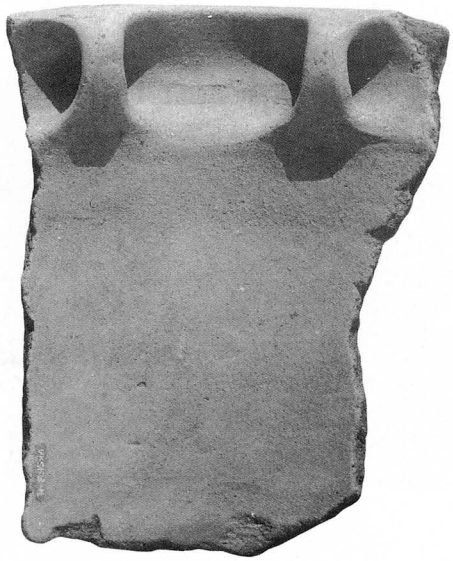
8



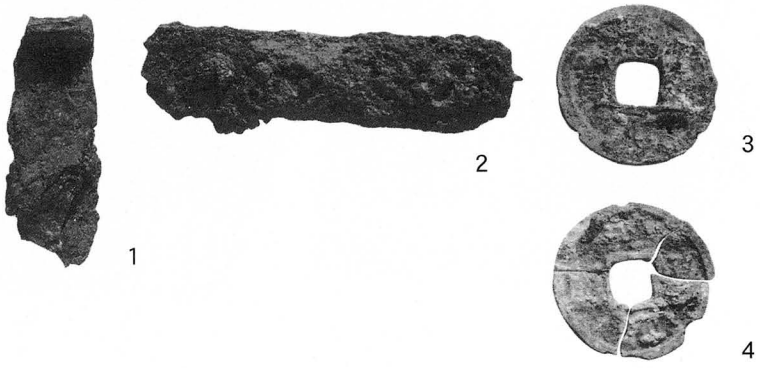
1　中世竪穴状遺構、溝出土遺物
　　1　竪穴状遺構SX01
　　2　溝SD06
　　3～8　溝SD08



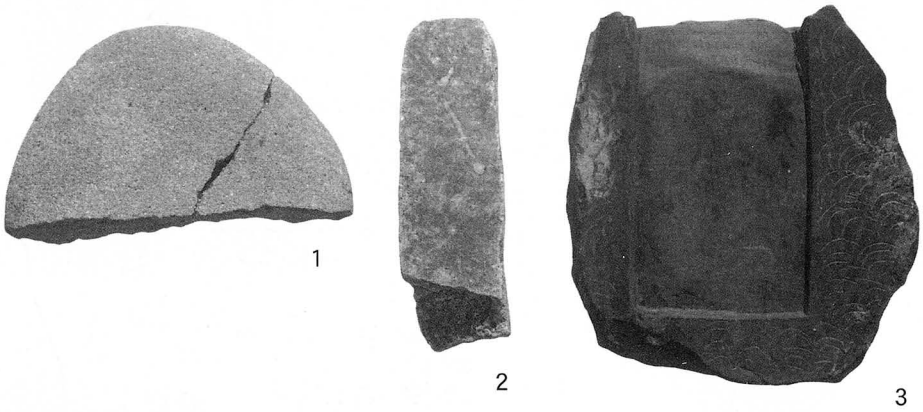
2　中世溝SD09



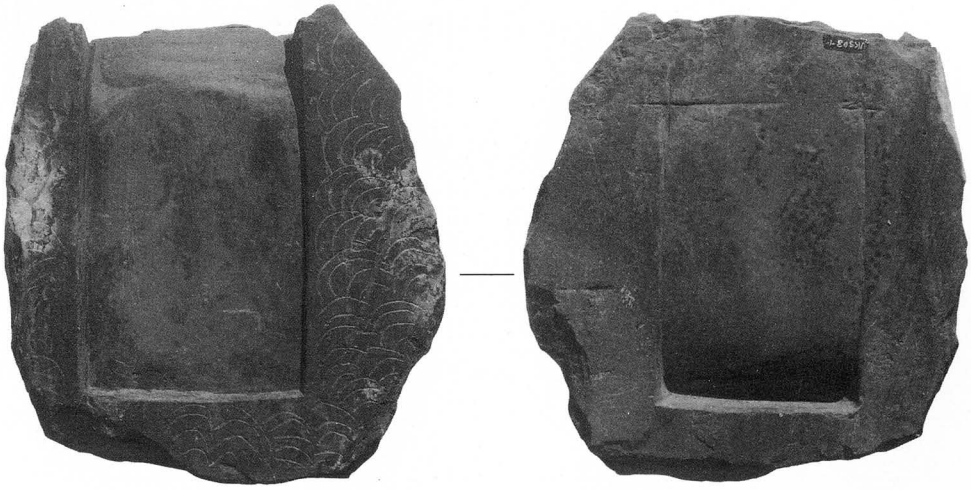
3　中世土坑SK13



1　中世溝SD06･08･09出土遺物
　1　溝SD06
　2　溝SD08
　3・4　溝SD09



2　古代住居跡、中世溝出土遺物
　1　古代住居跡SI04
　2・3　中世溝SD08



3　中世溝出土遺物
SD08

報告書抄録

ふりがな	おおみやまちかみじゅくかみつぼいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	大宮町上宿上坪遺跡発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
編 著 者 名	小川和博・大渕淳志・遠藤啓子・大渕由紀子・大野美佳
編 集 機 関	有限会社　日考研茨城
発 行 機 関	大宮町教育委員会
所 在 地	〒319－2215　茨城県那珂郡大宮町3135－6　　TEL.0295－52－1111（代）
発行年月日	2004年3月20日

収録遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
上宿上坪遺跡（かみじゅくかみつぼいせき）	大宮町宇留野字上坪193（おおみやまち うる の あざ かみつぼ）	344	094	36度32分23秒	140度25分25秒	2003.07.22～2003.08.22	2,040㎡	店舗建設工事に伴う事前調査

遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主な遺物	特 記 事 項
上宿上坪遺跡	集落跡	縄文時代 奈良平安時代 中世・近世	竪穴住居跡　5軒 土坑　15基 竪穴状遺構　2基 溝状遺構　5条	縄文土器・弥生土器 磨石類・打製石斧 土師器・須恵器・陶磁器類・土師質土器・硯・砥石・銭貨・鉄製品	中世城跡「宇留野城跡」に隣接する住居跡群と中世遺跡

茨城県那珂郡大宮町

上宿上坪遺跡発掘調査報告書

平成16年(2004) 3月10日　印刷
平成16年(2004) 3月20日　発行

発　行　株式会社　ダイナム
東京都荒川区西日暮里2－27－5　TEL　03-3802-7540
大宮町教育委員会
茨城県那珂郡大宮町3135－6　TEL　0295-52-1111㈹

編　集　有限会社　日考研茨城
茨城県稲敷郡江戸崎町佐倉3321－1　TEL　029-892-1112

印　刷　有限会社　田　辺　印　刷
茨城県稲敷郡江戸崎町佐倉3321－5